

平成18年度 博士論文

C. E. クーリーの「自己感情」論の現代的展開

東洋大学大学院 社会学研究科 社会学専攻  
博士後期課程 3年 4510020002番

小川 祐喜子

平成 18 年度

博士論文

C. H. クーリーの「自己感情」論の現代的展開



東洋大学大学院 社会学研究科社会学専攻  
博士後期課程 3年 小川祐喜子 4510020002

## 凡例

1. 本論で引用する C.H.Cooley の論文は、Robert Cooley Angell, *In Sociological Theory and Social Research: Being Selected Papers of Charles Horton Cooley*,(1930)のものを使用している。尚、その表記については刊行された年度のみを表記している。
- 2.本論で引用している *Social Orgnization* (1909) = 『社会組織論』大橋幸,菊池美代志訳 (1970) については、必要に応じて筆者が修正を施している。

はじめに	1
第1章 アメリカ社会学における C.H.クーリーの理論	7
第1節 アメリカ社会学の発展	7
第2節 アメリカ社会学と C.H.クーリー	10
第3節 アメリカ社会学とシカゴ学派	13
第2章 クーリーの社会学	19
第1節 クーリー社会学の特質	19
第2節 クーリーの社会学の展開	22
第3節 クーリーの社会学のアメリカ社会学への影響	26
第3章 クーリーの社会的自我論	32
第1節 「鏡に映った自我」概念 ——「想像」と「自己感情」のコミュニケーション——	32
第2節 クーリーの社会的自我論の問題——ミードによるクーリー批判——	39
第3節 クーリーの社会的自我論に対する再評価の動向	47
第4章 感情の社会性	54
第1節 感情へのアプローチ	54
第2節 社会的感情	58
第3節 「感情マネジメント」と「感情労働」	61
第5章 「自己感情」論の現代的展開	68
第1節 「自分というもの」と「自分ということ」	68
第2節 コントロールされる感情	72
第3節 「自己感情」論の現代的展開	74
結び	79
おわりに	85



はじめに

現在の日本において、「ニート」、「フリーター」、「ひきこもり」、「ドメスティック・バイオレンス」、「熟年離婚」、「下流社会」などといった社会問題を象徴する言葉が氾濫している。物が溢れ、情報が溢れ、とても裕福な社会であるが、どこか殺伐とした雰囲気にもまれており、人びとにとって生きづらさを感じられる社会となっている。人びとが生きる社会は、個人と個人とのさまざまな繋がりから構成され、個人もまた社会から大きな影響を受けている。

身近な問題からグローバルな問題まで、それらの問題を問い、解明する方法は多く存在している。このようにいくつもの社会問題に共通している事象は、個人が個人として存在しているということである。その際、個人に焦点を合わせるならば、それは「自我」(self)の問題として取り上げられることになる。

この混沌とした時代を生きる現代人の自我の様相はいかなるものだろうか。人びとは、自我をもって、一個人として日々の生活を送っている。しかし、人びとの自我は生得的にもっているとは考えがたく、固定したものとしてあるものでもない。それは他の人間と共に、生活することを通じて形成され、変化・変容するものである。自我の形成と変化・変容は、他者を通じて可能とされる。

人びとは、この世に生を受けてすぐに、父、母、兄弟、祖父、祖母といった血縁関係にある他者、さらに医者、看護婦、隣人、地域集団といった生活のなかで他者と次々と出会う。人びとは最初、他者から受身的な存在である。けれども、それはある時期までのことであり、次第に受身的な存在ではなくなり自我を確立していく。人間において、他者の存在を通じて自我が変化・変容していくことは当然のことである(山田,2004:176)。

このように、人びとの自我は、他者のとのコミュニケーションを通してその形成、変化・変容がなされるが、そこには多くの問いが内在しているであろう。自我形成に影響を与える他者とは、いかなる他者なのだろうか。そこで展開されているコミュニケーションとは、どのようなコミュニケーション形態なのだろうか。そのコミュニケーションにおいて、ひとは何を生成し、形成し、習得し、育んでいき、自我の形成、変化・変容を成し遂げていくのだろうか。

C.H.クーリーは、自我が他者とのコミュニケーションにより形成される事実をいち

早く指摘したひとりである。彼は、19世紀後半から20世紀前半にかけてアメリカで活躍した社会学者の一人であり、「鏡に映った自我」(looking-glass self) 概念を用いて自我の社会性を的確に表現した研究者である。

人間は自分の顔を自分で見るができない。自分の顔を知るためには、鏡を見る必要があり、鏡をみることで自分の顔がどのようなになっているかについて知ることができる。同じく、人間の自我も自分ではわからない。他者という鏡を通して、自我を知ることができる。

クーリーは、本来、自我が社会的なものであると考え、他者とのコミュニケーションを通じて社会的に形成されるものであると考えた。そして、孤立的なイメージの自我を強く批判し、「ワレワレ」あつての「ワレ」であることを強く主張する。クーリーによると、遺伝で継承されるもの以外は他者とのコミュニケーションや相互作用により発生する (Cooley,1909:9=1970:11)。自我もそのひとつである。

クーリーは、「鏡に映った自我」概念で、他者を鏡になぞらえ、他者に映った自我の形成、変化・変容を的確に示した。クーリーにおける他者の意味は、他者のマインドを「想像」することから始まる(注1)。他者のマインドにおいて自分がどのように認識され、評価されているかについて「想像」する必要がある。「想像」を介した他者との関わりにおいて、「自己感情」(self-feeling) は生じてくる。この「自己感情」が自我であるとクーリーは考えている。

クーリーの自我論においては、「自己感情」を自我として規定したところが特徴であるといえる。しかし、この見解は多くの批判の的となっている。クーリーは、孤立的な自我のイメージを強く批判し、他者あつての自我であることを強く主張する。しかし、「想像」によって他者を捉え、「自己感情」に自我を求める見解は、一見、自我の孤立的なイメージを変えるものには見えない。「想像」による他者の見解は心的なものであり、「自己感情」に自我を求める見解は自我の起源、および「自己感情」の起源もあいまいにされてしまうように見える。

しかし、「自己感情」に自我を求めたクーリーの見解は、「鏡に映った自我」概念を検討するだけではその内実には十分に明らかにされない。「鏡に映った自我」概念が展開されている『人間性と社会秩序』(1902)では、感情についての問題が包括的には取り扱われていない。けれども、『社会組織論』(1909)では包括的な見解が展開されており、3部作の最後の『社会過程論』(1918)では彼の思想が集約されている。

クーリーは、社会学の主軸である「個人と社会」を切り離されるものとして考えない。個人と社会は表裏一体の関係にある。それは個人と社会とが、ハーモニーを奏するようなものとされる。クーリーは、『人間性と社会秩序』では、社会を人間の社会性のなかに存在するものとして考察し、その輪郭を明らかにしようと試みている。また、『社会組織論』では、精神的側面から社会組織とよぶ相互作用の多様化と拡大とに焦点を絞り、その考察を試みている。そして、『社会過程論』では、個人と社会の不可分性を包括的に検討し、有機的観点と組織的観点とを関連づけることを試みている。クーリーの中心的テーマとされている「マインドは社会である」、「社会はマインドである」ことが、「人間性」、「組織」、「過程」のそれぞれの視点から展開されている。

他者ありきの自我の社会性を主張し、「自己感情」を自我であると結論づける彼の思想は、この3部作により完結されている。したがって、クーリーの「自己感情」論は、「鏡に映った自我」概念のみではなく、他者、コミュニケーション、意識についての思想および「第一次集団」論、「デモクラシー」、「共感的イントロスペクション」などといった概念を押さえることにより、新たな局面が明らかにされることになる。そして、クーリーの「自己感情」を検討することにより、感情を中心とする問題および新たな社会的自我論の展開が可能となると筆者は考える。

ひとは、家庭での自我、職場での自我、地域集団での自我などといったように、所属する集団により求められる役割が異なる。そして、1990年代後半からの携帯電話やインターネット電子メディアの急速な普及は、所属する集団を拡大させ、メディアが他者との関わりの場となっている。このように、他者との関わりが流動化する社会に生きている現代人は、カメレオンのように多種多様な色の自我を形成している。

けれども、この現状が人びとにとって「私とはいったい何なのか」という問いを生みだし、「私は今ここに存在している」といった実感が失われてしまっているような、精神的状況を生み出してしまっている。1990年代を境に、「私をさがす」、「ほんとうの私を見つける」など、さまざまな「自分さがし」という言葉が巷に広まっている。書店には「自分さがし」の本があふれ、広告や雑誌ではキャッチコピーに多く使用されている。さらには、「人生の目標」を「私さがしです」と答える人まで登場しているという（香山,1999）。

しかし、このような「自分さがし」とはいったい何を意味するのだろうか。「自分さがし」とは人間の自我が他者との関連において、他者との相互作用を通じて形成され、



展開することを意味する。それゆえに、他者との関係性から探さなければならないものである。では、他者とのコミュニケーションとはどのような内実のものなのだろうか。

ところで、クーリーにおける他者とのコミュニケーションについて考えるには、自我とコミュニケーションとの関係がどのようなものであるかについて明らかにされなければならない。本論は、クーリーの社会的自我論に伴う、他者、コミュニケーション、マインド、想像についての考えを明らかにしたうえで、クーリーの「自己感情」論の再評価を行うことを目的としたものである。さらに、その再評価を糧とし、感情を中心とする社会的自我論の展開を試みる。そして、クーリーが自我と結論づける「自己感情」が、「自分さがし」と深い関係にあることを明らかにし、さらには今後の感情社会学の分野における「自己感情」の重要性を明らかにしていく。

本論文では、まず第 1 に、アメリカ社会学とクーリーの位置づけを明らかにしていく。クーリーは、アメリカ社会学において第一世代に属する一人である。人生の大半をミシガンで過ごしたクーリーが、社会学者としての人生を歩き始めた頃は、アメリカ社会学にはサムナーによって高く評価されていたスペンサーの社会学が浸透していた。サムナーは、1875 年にイェール大学で初めて社会学を講義した社会学者である。しかし、サムナーの考え方は独自の社会ダーウィニズムを展開したもので、それは生物学的社会学であった。そのサムナーを批判していたウォードにおいては生物学的社会学から心理学的社会学へと移行が明確に見られ、コロンビア大学のギディングズにおいても心理学的社会学が展開された。

このような時代に研究を進めていたクーリーは、スペンサーの社会学に完全に依存することなく、ダーウィン、ギディングズ、ウォード、デューイ、ジェームズ、ボードウィンたちからの思想を学んで、独自の社会学を展開することとなる。

ところで、クーリーが晩年期を迎えていた頃は、アメリカ社会学においてはシカゴ学派が隆盛期を迎えていた。クーリーは、シカゴ大学に在学したこともなければ、シカゴ学派の一員でもなく、その成立に携わった人物でもない。それにも拘らず、彼はシカゴ学派との関係でよく語られる。それゆえここでは、社会学者として歩んでいった彼の人生を、アメリカ社会学の歴史とともにさらにシカゴ学派との関係も視野に入れながら辿っていくことにする。

第 2 には、発展していくアメリカ社会学のなかでクーリーが、自分で見て、感じと

ったアメリカ社会から構成した理論とアメリカ社会学に残した功績の位置づけをおこなう。クーリーについては、「鏡に映った自我」概念や「第一次集団」論が有名である。ここでは、「鏡に映った自我」概念を示したクーリーの思想の内実を明らかにするために、「客観的内観」方法を用いて個人と社会との表裏一体説を展開する彼の思想、「第一次集団」論におけるコミュニケーション論とそこで育まれる「人間性」についての思想を辿っていくことにする。さらに近代的コミュニケーションの発達していくなかで、彼が発見した社会変化と個人を形成させている内実、および「デモクラシー」についての思想を詳細に辿っていき、クーリーの思想における特質とその展開を行なうことにする。

第3に、クーリーの「自己感情」に焦点をあて、他者とのコミュニケーションから生成、形成される「自己感情」のプロセスを辿り、クーリーの社会的自我論を検討する。まず、クーリーが社会的自我論を展開するにあたり、大いに影響を受けたとされるW. ジェームズの自我論を辿る。そして、クーリーはジェームズの影響を受けながら独自の社会的自我論を展開している。それは、「鏡に映った自我」、クーリー自身の子どもを対象とした観察結果を中心に展開したものとなっている。次いで、ミードのクーリー批判からクーリーの社会的自我論における問題点を明らかにしていく。これまでの社会学においては、ミードによるクーリー理解が一般的な理解とされてきた。そこで、ミードのクーリー理解を踏まえたうえで、H. シューベルト、D.D. フランクス、V. ゲーカス、G. ジェイコブスによるクーリーの再評価研究を検討し、さらにクーリーの「想像」、「共感」、「共感的イントロスペクション」、コミュニケーションについて検討しつつ、彼の「自己感情」の再評価を試みる。

第4に、感情が単なる身体的な自動反応、生物学的、生理学的に解明しうるものではなく、シグナル機能を有したものであること示し、現代人における感情の様相を展開する。グローバル化が進み、混沌としたこの時代に生きる現代人は、「感情労働」による「感情マネジメント」により「感じなければならない感情」に囚われている。A.R. ホックシールドによると、現代人の感情は公的領域、私的領域ともにコントロールされている。ここでは、管理され、コントロールされてゆくことによって見失われていく、「自己感情」とその有意義性を明らかにしていく。

第5に、「自分というもの」と「自分ということ」との相違、「対象化された自分」と「対象化する自分」との相違から、自我の位置づけを明確にする。現代人において

は、感情がコントロールされてしまっているその様相を明らかにする。最後に、クーリーが自我とみなす「自己感情」は、2つの主要な焦点により、「自分さがし」を可能にさせる感情であることを明らかにする。そして、今後の感情社会学において、積極性、主体性をもった「自己感情」からのアプローチが必要であることを示し、「自己感情」の新たな展開を目指していくことを目的とする。

(注1) 本論における「mind」の訳語としては、心や精神と訳さず「マインド」と表記している。

## 第1章 アメリカ社会学における C.H.クーリーの理論

### 第1節 アメリカ社会学の発展

社会学は、フランスの A.コントやイギリスの H.スペンサーの社会学により誕生した。しかし、ヨーロッパで誕生した社会学は、第二次世界大戦時のナチズムの勃興によりその力を失うこととなるが、そこに現われたのがアメリカ社会学である。そして、第二次世界大戦以後は、社会学といえばアメリカ社会学を意味していたほど、アメリカ社会学は世界の社会学をリードした。そして、それは、一方では社会調査と重なったものであり、他方では T.パーソンズの構造機能主義理論のイメージが強いものであった(注1)。

しかしながら、正統なアメリカ社会学として考えられるものは、アメリカ生まれの、アメリカ色の強い、アメリカ独自の社会学であるシカゴ学派の社会学である。すなわち、第一次世界大戦から 1930 年代中ごろまでのアメリカ社会学は、一般にシカゴ大学社会学科の歴史として描くことができ、シカゴ学派を無視してアメリカ社会学の歴史を語ることはできないといえる(船津,1999)(注2)。

交換理論、シンボリック相互作用論、現象学的社会学、エスノメソドロジー、感情社会学といった多方面に渡り専門化、分化が進んでいる今日のようなアメリカ社会学の始まりは南北戦争以後のことである。社会の再組織化を目的として、1865 年に「アメリカ社会科学協会」(The American Social Science Association) が設立された。アメリカ社会学は、コントがフランス革命後の社会の混乱を秩序化する手段として「社会学」を考え出したのと同様に、南北戦争後の混乱した社会を秩序化するために現われた学問である。とりわけ、コントの社会学は、1850 年代から 1860 年代にかけてはアメリカ社会学に影響を与えたが、理論を重視する「アメリカ社会科学協会」の重視する理論傾向とは合わなかったためにその後は衰退の一途を辿ることとなった。そこでコントに代わって、アメリカ社会学に浸透したのがスペンサーの社会学であった。

アメリカにおける社会学の最初の講義は、1875 年にイエール大学において W.サムナーによって行なわれた。サムナーは儉約家で働き者の修理屋を父とし、質素、勤勉、儉約、禁酒を守ることを徳とし、価値とし続けた人物であった(Coser,1978=1981:35)。

「アメリカの衣装をつけたスペンサー主義」者と呼ばれるサムナーは、進化論と動物

有機体のモデルとを社会に適用し、社会有機体説を確立した。それは、確実にスペンサーに依存したものであった (Coser,1978=1981:35,船津,1999:55)。サムナーは、社会が進化の産物であるという考えに即して、進化論的視点を社会科学に導入し、人間生活の根本原理は生存競争であると主張し、独自の社会ダーウィニズムを展開した(船津,1999:55)。すなわち、彼は、人類の歴史を個人と個人、階級と階級、集団と集団との絶えざる闘争とみている。

南北戦争後のアメリカ資本主義の急速な発展は、急激な産業化、都市化が進行することにより、移民労働者が流入し、アメリカ社会を根本的に変えていくことになる。アメリカ社会学はこのような時代の流れのなかで「秩序の社会学」として成立していくこととなった(注3)。サムナーを筆頭に、「ファースト・ビック・フォー」とよばれる A.スモール、L.F.ワード、F.H.ギディングズたちの第一世代の功績によりアメリカ社会学は発展していった。

「シカゴ学派」の父とも呼ばれているスモールは、1881年にコルビー大学の歴史と政治経済学の教授に、1889年には同大学の学長に就任することとなる。その後、スモールは、道徳科学の講義を「社会学」に代えて開始した講義が判断材料とされ、1892年にはシカゴ大学社会学科を創設する目的で招かれ、世界で初めて現代科学としての社会学の発展と社会学科の設立に多大な力を尽くしたのである。

スモールは、1905年にアメリカ社会学科の設立に関与し、1912年には第4代目の会長に就任し、さらにはパリの国際社会学会研究所の所長に就任し、その活躍は広範囲に渡るものであった。スモールは、大学においても大学外でも、きわめて有能な経営力を発揮した人物であった。けれども、彼の学問に対する評価は、周辺のなものであったために、社会学の体系化を欠いており、理論内容もそれほど注目されるものではなかったために、比較的軽視されている。

L.A.コーザーによると、当時のアメリカ社会学は、「道徳的奨励、事実の記述、社会問題、保守的あるいは改革思想的ダーウィニズム、キリスト教的精神高揚、制度派経済学、種々の社会病理の研究など」(Coser,1978=1981:28)といったように雑多の寄せ集めであった。とりわけ、19世紀の中葉から20世紀の初頭にかけてのアメリカ社会学は、スペンサー主義者であるサムナーの影響がありスペンサーの学説を高く評価するものであった。19世紀の後半におけるスペンサーの社会学は、社会有機体説の典型であると言われ、異常なまでに流行していたのである。

そのときに「生物学的過程への依存と自由放任原理への依存との双方から解放する役割を果たし」(Coser,1978=1981:48)、「生物学の足枷から解放する最初の大きな試み」(Coser,1978=1981:51)を行なったのがアメリカ社会学会初代会長であったウォードである。彼もまた、アメリカ社会学の最初の専門的大著である『動態社会学』(1883)においてはっきり述べているように、コントとスペンサーから深い影響を受けたひとりであった(Karpf,1932=1987:243)。彼はコントとスペンサーの2人の独自性を十分に認めたいうで、彼らの理論を吸収しつつ独自の理論を構築した。コーザーによると、自然は「発生」(genesis)の法則に従い進行するが、人間進化は「目的」(telesis)によって導かれる。ウォードは、この区別を導入することで、一種の二元論的解釈である「自然の進化が無目的に進行するのに対して、人間の進化は目的的行為によって特徴づけられる」(Coser,1978=1981:48)との見解を導き出した。

ウォードは、独学で社会学を学び、目的的過程を強調し、社会組織の独自で人為的な性格を強調しながらも、繰り返しダーウィン主義の言語と進化論の色彩に帯びた宇宙論的思弁に逆戻りしていくことにより(Coser,1978=1981:51)当時アメリカ社会学で流行っていたスペンサーの理論体系の土台を揺るがしたのであった。ウォードの見解は、常に首尾一貫しているものではなかったが(Coser,1978=1981:51)、彼の影響により当時のアメリカ社会学は、生物学的社会学から心理学的社会学へと移行していくこととなった(船津,1999:56)。

さらに、アメリカ社会学において心理学的社会学の基礎を築きあげたとされるコロンビア大学のギディングズは、社会学が心理学的な科学であることを進んで認めていた。彼は、社会の本質について「他の存在を自己と同類と考える『同類意識』(consciousness of kind)を規定」(船津,1999:56)し、生物学的な過程でないことをいち早く指摘したのである。

アメリカ社会学は、ウォードやギディングズの研究により、生物学的社会学から心理学的社会学へと大きな変化を迎えていた。そして、この時代、彼らともに1920年代に至るまで持続する心理学的社会学に貢献したもう一人の人物がミシガン大学のクーリーであった。

## 第2節 アメリカ社会学と C.H.クーリー

C.H.クーリー(Charles Horton Cooley 1864~1929) は、アメリカの社会学史上「ビッグシックス」の一人として名が上げられ、ユニークな人物とされている。クーリーの家系はニューイングランドで始まった。農家を営む祖父 T.クーリー (Thomas Cooley) は 15 人の子どもに恵まれ、彼の父である T.M.クーリー (Thomas McIntyre Cooley 1824-1898) は 8 番目の子どもとして生を受けた。あまり裕福ではない家庭で育ったクーリーの父は、農業に自分の好きなことを見つけ出せず、高等教育を受けた後、法学の道へ進んでいった。そして、1846 年に弁護士資格を得た T.M.クーリーは、その活躍の場を広げて行き、私生活では M.エリザベスと結婚し、6 人の子どもに恵まれた (Jandy,1942:9-10,Jacobs,2006:6)。

1864 年 8 月 17 日ミシガン州アン・アーバーにてこの世に生を受けたのが、クーリーである。小さくて、恥ずかしがりやのクーリーは、8 歳になる頃から成人になるまで軽い病気にかかっていた。T.M.クーリーの築きあげた家庭は、ミシガンの法曹界と社交界のエリートとして一握りの上流階級に属していた。しかし、非常に活動的で野心家であった父は、子どもたちを威圧する傾向にあったという。若き日のクーリーは、このような家庭環境と威圧的な父から身を守るために殻に閉じこもる生活を過ごしていた。彼は、長年にわたり、父から疎外されながらも、どこかで依存するといった心が引き裂かれた状態にあったという (Jacobs,2006:7)。

このような青少年時代を過ごしたクーリーは 16 歳にしてミシガン大学の学生となり、そこで 4 つの語学、歴史学、工学、自然科学関連の教科を履修している。彼は、卒業までの間にコロラド、ノースカロライナ、ロンドン、ミュンヘン、ルツェルン、ドレスデン、ベルリンなどを旅して自由な時間を過ごした。クーリーにとっては、このような自由な旅が功を奏したのか、長年に渡り苦しめられ続けた病気を克服することができたという。1884 年 12 月に帰国したクーリーは、再び勉学に励み 1887 年に機械工学の学士号を取得した (Jandy,1942:21,Jacobs,2006:8)。この翌年に始めてクーリーは、スペンサーの社会学と出会うことになる。その後のクーリーは、エンジニアやデッサンを学ぶが、もっと現実世界を経験すべきだとする父の勧めもあり、約 2 年間に渡りワシントンで修問通商委員会や国勢調査局に勤務することになった。しかし、それは彼にとっては不向きな職業であった (Coser,1978=1981:76,Jacobs,2006:8)。

けれども、他方でワシントンでの生活は、クーリーの人生を大きく左右するものとなった。それは、社会学へと導くきっかけを与えたギディングズとウォードたちとの出会いがあったからである。クーリーは、ギディングズの講演によって、社会学に対する向上心と激励を与えられ、社会学のアカデミックな可能性を気づくこととなる (Cooley,1929b:5)。また、クーリーが尊敬する人物の一人であるウォードからは、数年に渡る往復書簡により多くのアドバイスを受けている (Jandy,1942:30,Jacobs,2006:8)。彼は、ウォードの学説に触れることによりそれまで十分熟読していなかったコントの社会学を知ることとなった。

ギディングズとウォードとの出会いにより社会学と本格的に向き合うことに決めたクーリーは、それまで勤めていた仕事を辞め、ミシガンに戻り社会学者としての人生を歩み始めることとなる。ミシガンに戻ったクーリーは、ミシガン大学で経済学の教鞭を執ることとなり、1894年には社会学の教鞭を執り、1899年に助教授、1904年には準教授、1907年には教授となった。そして、1918年にアメリカ社会学会の会長に選出され、生涯のほとんどをアン・アーバーで過ごしながらかアメリカ社会学史上にその名を残したのである (船津,1999:57,Jacobs,2006:10)。

彼が、ミシガンに戻り社会学者としての人生を歩み始めた時期のアメリカ社会学は、スペンサーの社会学の影響を残しながらも発展途上にあつた。このような時代背景のなか、クーリーもまた同時期の研究者と同じくスペンサーの思想に魅せられたひとりであつた。しかし、クーリーの思想は、ギディングズやウォード、さらにはJ. デューイの影響もありスペンサーに完全に依存するのではなく、その考えを深め、より深い意味での社会有機体説を主張するものであつた (Jandy,1942:84)。学部時代よりデューイの講義を聴講していたクーリーは、ミシガン大学に戻った後もデューイの講義を聴講するとともに研究も彼と一緒に進めていた (Schubert,1998:9)。彼は、デューイが社会はスペンサーが理解していたよりも深い意味での有機体であり、言語はそれの感覚中枢(sensorium)であると主張していた点で、彼と似たような見解をもつていた (Cooley,1929b:6)。

クーリーは、スペンサーの著作から社会学に出会ったが、経験的な裏づけを重視する彼にとって、スペンサーの有機体説は人間生活に直接言及することのない、生物学の皮相的、機械論的な類推にすぎなかつたのであると、前田は評している(前田,1999:73)。スペンサーは、道徳主義者であり、やや独断的であつたが誠実で犠牲を



厭わない人物であった。それゆえにクーリーは、スペンサーは生来、人類や社会の観察者には適していないと述べている (Cooley,1920:279)。当時のアメリカ社会学においては、スペンサーの社会学が大きな影響を与えていたが、クーリーにとってはダーウィンの見解のほうが納得できるものであった。コーザーによると、クーリーは、ダーウィンが生物学の世界で発見した複雑な相互関係に興味を覚え、生命の有機的統一と全体性の感覚を見出した (Coser,1978=1981:77)。クーリーは、人間世界を理解するために自然の一般的プロセスとその研究方法をダーウィンから学んだことを認めており (Cooley,1929b:4)、シューベルトによりダーウィン主義者と位置づけられている (Schubert,1998:9-10) (注4)。さらに、クーリーは、若き頃のゲーテから影響を受け、またその文学的表現からも見て取れるように、その表現方法や記述にはエマーソンの影響が残っている (Cooley,1929b:4)。

クーリーが、社会学者の道を歩み始めたころのアメリカ社会学は、スペンサーの社会学の色に染められた生物学的社会学から心理学的社会学へと大きな変革を迎えるなど、発展途上にあつた。それゆえに、多くの研究者がヨーロッパで社会学を学んでおり、マクロな社会観が中心的なものとされていた。しかしながら、生涯を通してミシガン大学でのみ社会学研究を進めていたクーリーにとっては、ヨーロッパ社会学で普遍的なものとされた観点が必ずしも彼にとっての普遍的なものとはならなかった。クーリーにおける、社会観とは身近な日常生活の観察から見出されたものであり、そこにクーリー独自の社会学の特質がある。

クーリーは、人間性、自然、知性、社会的自我やアイデンティティの起源や特徴などについて広く関心を有し、(Jacoby & Glaberman,1995,Franks & Gecas,1992,Scheff,2003)、社会プロセスの主たる側面とされるコンフリクト、生存、適応を取り扱い、「デモクラシー」、伝統、社会変動、社会組織の分析、社会学理論に至るまで多くの業績を生み出している (Jacobs,1979,Green,1988,Jacobs,2006:1)。

クーリーと社会学との出会いは決して早いものではなかったが、多くの社会学者達との出会いによりメンタルを育ていき、社会学者として人生を歩んで行ったのである。そして、クーリーは『人間性と社会秩序』(1902)、『社会組織論』(1909)、『社会過程』(1918)といった3つの主要な著作により、彼の社会学を展開し心理学的社会学へも貢献していくこととなった。

### 第3節 アメリカ社会学とシカゴ学派

生物学的社会学から心理学的社会学へと移行していったアメリカ社会学であるが、その始まりはスペンサーの社会学であり、当時のアメリカの社会学者が影響を受けていたことはすでに触れた。ダーウィンの『種の起源』が世に出る2年前にコントがこの世を去ったことにより、スペンサーがアメリカ社会学において有力な位置を占めることとなった。

F.B.カーブによると、19世紀後半の思潮におけるスペンサーの位置は、19世紀前半の思潮におけるコントの位置と似ている。それは、コントもスペンサーも社会学の発展に特殊な意義をもたらし、社会学者であるとともに宇宙論者であり、哲学を体系化した人物であった (Karpf, 1932=1987:37)。スペンサーは、ダーウィンの実り豊かな帰納法を普遍化しようと努力し、この方法を社会的な研究の分野にもちこもうと努力したのである。スペンサーの研究成果により「コントの見通しが科学的活動の明確なプログラムをもった外観を呈するにいたった」(Karpf, 1932=1987:40)と言われるほどに、彼の貢献は社会科学にとって重要な位置を占めていた。

スペンサーの社会学が圧倒的に指示されてきたアメリカ社会学は、ウォードやギディングズらの影響により心理学的社会学へと移行してくこととなる。徐々に発展していったアメリカ社会学であるが、その黄金時代を築き上げたのはシカゴ学派であった。シカゴ学派の社会学でまず挙げられるものは、R.E.パークやE.W.パージェンスの「都市社会学」、「人間生態学」、L.ワースの「アーバニズム論」である。その時代とは、シカゴ社会学をどの側面に重点をおくかにより異なりはするものの、「社会学方法論・社会調査法」の側面からすると、シカゴスタイルと呼ばれる「徹底したフィールドワークによる経験的研究」が確立されたときであった (中野, 1997:4)。

シカゴ学派の歴史は、サムナーと肩を並べてアメリカ社会学の第一世代を築き上げたスモールが、1892年にシカゴ大学に移ってから始まる。コルボイ大学で学長であったスモールは、シカゴ大学の学長であるW.R.ハーパーの学問に対する考えに共鳴し、シカゴ学派の創設に意欲的に取り組んでいった。スモールは、学科創設に関して、G.E.ヴィンセント、C.R.ヘンダーソン、W.I.トーマスを同僚としてシカゴ大学社会学科をスタートさせた。1895年には、自らが発起人、編集者、寄稿者となりアメリカで初の社会学雑誌である『アメリカ社会学雑誌』(American Journal of Sociology)を発行し、

1906年にはアメリカ社会学会の機関誌として発行されるようになった（船津,1999:72-73）。他方で、ヘンダーソンとヴィンセントは、生物学的還元主義の立場から、宗教実践による社会改革を考えていたために、社会学研究というよりも、宗教的、実践的活動に力を入れていった（船津,1999:73）。

さらに、スモール、ヴィンセントたちと同じく、シカゴ学派の第一世代として位置づけられるトーマスは、社会学研究的にシカゴ学派の一翼を担った人物である。当初のトーマスは、この時期の社会学者と同じくスペンサーの『社会学原理』などを読み進めていくなかで関心を社会学へと移していった。彼は1893年からの1年間シカゴ大学大学院に通い、スモールやヘンダーソンのもとで社会学の研究を行ない、1895年にシカゴ大学の講師となり1918年からは教授を勤めることとなった（船津,1999:116）。

トーマスは、生物学的研究から出発し、のちに心理的感情を社会心理学的に問題とするようになり、その社会的、文化的差異を明らかにした。そして、「注意」・「習慣」・「危機」の心理学へと転換し、「願望」・「態度」・「価値」の社会学的・社会心理学的研究へと進んでいった。

船津によれば、トーマスの研究は、大きく分けて5段階に分けられる（船津1999:116-135）。第1段階は、1896年から1907年までの民族心理学が中心とされた時期である。この時期に『性と社会』（1907）が出版されている。第2段階は、1908年から1910年までの文化の起源に関する社会心理学研究の時期である。この時期には、『社会的起源のソースブック』（1909）が公刊されている。

第3段階は、1911年から1926年までの移民の問題についての社会学研究が中心とされた時期である。F.W.ズナニエッキとの共作である『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』（1918-1920）では、当時、大量にアメリカに入り込んできていたポーランドの移民を問題として取り上げ、彼らがアメリカの生活にどのように適応していくかという問題を研究の対象とした。そこで、移民の適応、同化、統制、逸脱、社会変動を解明する社会統制や社会組織の社会学を展開し、手紙、生活史、新聞記事、裁判記録、各種の社会機関の記録などを大いに研究に活用し主観的経験を把握することを実行していった。彼らの研究は、シカゴ社会学の研究者に多大な影響を与えたことで知られている。

第4段階は、1927年から1936年までの子どもの行為について研究が行なわれた時期である。この時期には、『アメリカの子ども』（1928）が出版され、第5段階となる

1937年から1947年間は、『原初的行動』（1937）が刊行され無文字社会の研究が行なわれた時期である（船津 1999:118）。

後期のトーマスは、移民や子どもの「不適応」という社会問題へとその関心を移していった。彼は、性差や人種差が、生理学的差異により決定づけられるものというよりは、社会的差異によって決定づけられるものであると考えるようになり、社会的要因と社会心理的要因に関心を移していくこととなる。彼は、人間がある出来事に対して適応していくことについて人間の主観的、主体的適応であると考え、社会的現象には「意味」があることを見出したのである。社会的現象を明らかにするには、主観的要因を明らかにする必要があると考えたトーマスは、そこに社会生活の客観的、文化的要素を社会集団の成員の主観的特性を表わす、「態度」と「価値」概念を生み出したのである（船津,1999:120）。経験的データの収集に基づいて一般化や法則化を行なおうとする社会学者であったトーマスが目指した社会学とは、実際の現実の状況を具体的に明らかにすることに関心を置き、人間の主観的側面を重点に当て一般化するものであった。

また、トーマスが、シカゴ学派の第二世代を築き上げたパークをシカゴ大学に招いたことによりシカゴ学派の勢いは増していくこととなる。パークは、社会について「集団行動の挑戦に 대응すると同時に、その過程を方向づけ、それに挑戦しようとする社会統制の道具」と見なし、「相対的に流動的な社会過程が社会生活を支配する」と考えた（Coser,1978=1981:105）。人間生態学の創始者であり、都市社会学の先駆者とされるパークは、新聞、コミュニケーション、集合行動、人種、移民、都市など、広範囲な領域について研究を推進していった。パークのもとで、シカゴ学派社会学は全盛期を迎えることになった（船津,1999:139）。

パークが取り上げたテーマは、一見ばらばらであったが、そこには理論的戦力が確かに組み込まれている。それが、「競争」(competition)、「コンフリクト」(conflict)、「アコモデーション」(accomodation)、「同化」(assimilation)からなる過程である。パークが描く都市とは、「ソサイエティ」レベルを指すものであり、生物的と文化的レベルで組織されている。「競争にもとづく生物的な共生的社会」を「コミュニティ」と呼び、「コミュニケーションとコンセンサスにもとづく文化的社会」を「ソサイエティ」と呼ぶ（船津,1999:156）。そして、「コミュニティ」を研究する分野が、人間と人間との関係を明らかにする「人間生態学」である（船津,1999:157）。パークにおける「競

争」が「コミュニティの基本的な組織原理」となり、「コミュニティ」を基礎として成立するものが「ソサイエティ」となる。「ソサイエティ」では、「コミュニティ」の「競争」が意識的に取り扱われ、ここで大きな役割を果たすものが「コミュニケーション」ということになる。パークにおける「ソサイエティ」の基礎過程とは、コミュニケーションということになる（船津,1999:159）。

船津によると、パークは人間におけるコミュニケーションについて、G.タルド、ボードウィン、クーリー、ミードなどの研究を検討していた。パークにおけるコミュニケーションは、「表出—解釈—反応」からなる。その内容とは、ミードのコミュニケーション論と同じく、ひととひととの間における不一致、コンフリクト、相互の解釈、共通理解である（船津,1999:168）。共生に基づく「競争」は慣習や法により規制される。「競争」は、コミュニケーションにより「コンフリクト」となるが新たなコンセンサスを導くことで、文化、秩序、ソサイエティが形成される。パークの社会学研究は、「都市社会」論、「人種問題」論、「コミュニケーション」論と広範囲に渡るものであり、その後の研究者に多大な影響をもたらしたのである。

スモールを創設者とするシカゴ学派は、社会学と言えバシカゴ学派社会学といわれるほどにアメリカ社会学界において圧倒的な力を誇り、その第二世代を築いたのである。しかしながら、シカゴ学派は、それまでシカゴ学派を担ってきた人たちの引退や分散、シカゴ学派の特色でもある、日記、手紙、記録などを用いたユニークな研究方法が少なくなってきたこと、シカゴといった極めて特殊な種類の都市を研究対象としたものであるがゆえに一面的であるといった批判を浴びたことなどが重なり、1930年代を境に衰退の一途を辿ることになった。衰退したシカゴ学派に代わってアメリカ社会学に君臨した社会学が、パーソンズを中心とする構造機能主義社会学や量的社会調査の社会学であった。

1935年を機にその存在を薄くしていったシカゴ学派であるが、数十年の時を経たアメリカ社会学の第四期にあたる時期に再び脚光を浴びることとなる。その復活は、「都市社会学」と「シンボリック相互作用論」という2つの研究において、「シカゴ学派再考」の動向として成し遂げられたのである（船津,1999:69）。

そして、クーリーは、アメリカの第四世代のシカゴ学派と関係づけられているのである。シカゴ学派を記述した著作には、クーリーの影響が語られており、シンボリック相互作用の源流としてミードやトーマスらと並んでクーリーの名前もあげられてい

る。クーリーとシカゴ学派は、一体のものとして、あるいは両者には深い関係があったかのように語られることが自明とされている（前田,1999:76）。

終生ミシガン大学で過ごし、シカゴ大学に在学したこともなければ、シカゴ学派の社会学部の形成に携わったこともないクーリーが、シカゴ学派と関係づけられて語られることは、主にシンボリック相互作用論の中心人物である H.ブルーマーの影響が大きいのである。彼の著作においては、シカゴ学派の社会学者やミード、デューイと並べてクーリーの名前が挙げられている。前田によると、ブルーマーの言及がクーリーとシカゴ学派やシンボリック相互作用論との関連を決定的に印象づけた（前田,1999:77）。

けれども、ブルーマーはミードについてかなりの紙幅を割いて言及しているが、クーリーについては名前を挙げるに留まっている。「ミードの思考の哲学的側面を払拭しようとし、それを科学化する努力を行ない、方法論的立場を明確にした」（船津,1976:34）ブルーマーは、ミードの影響を多く受けているがゆえに、当然のことながらミードを通してのクーリー理解といえる。

他方、クーリーがシカゴ学派の一員として扱われることとなったのは、後にシカゴ大学で重要な役割を担うこととなるデューイのミシガン時代の門下生であったからである。クーリーにとって、デューイは尊敬する人物の一人であり、彼と似かよった考えをもっていた（Cooley,1929b:6）。さらに、クーリーがシカゴ学派と関連して位置づけられていることには、ミードとの関係が大きいといえる。ミードは、ドイツ留学の帰国後からデューイと共に新設のシカゴ大学に赴任する 1894 年までの間ミシガン大学に勤めている（船津,1989:168）。ミシガン大学に勤めていたクーリーとミードとはこの間に出会ったのである（Schubert,1998:9）。クーリーとシカゴ学派とが関係づけられる主な理由は、彼がデューイとミードの両者と関係があったので、それに注目したシカゴ学派のブルーマーによる解釈の影響が大きいといえる。

（注1）船津によると、パーソンズが取り上げている学者は、A.マーシャル、E.デュルケーム、M.ウェーバー、V.パレートといったようにヨーロッパの経済学者や社会学者などである。それゆえに、彼の社会学は必ずしもアメリカ的ではない（船津,1999:8）。

（注2）アメリカ社会学は、南北戦争後の産業化、都市化による社会の混乱を秩序化するために現われた。第一期のアメリカ社会学者には、「ビック・シックス」と呼ばれる A.ス

モール、L.ウォード、W.G.サムナー、F.H.ギディングズ、E.A.ロス、C.H.クーリーが存在する。第二期のアメリカ社会学は、W.I.トーマス、R.E.パークを中心とするシカゴ学派の社会学者によって担われた。シカゴ学派は 1920 年に最盛期を迎えることとなるが、1930 年代半ば以降からパーソンズの率いるハーバード学派やラザースフェルドや R.K.マートンらの率いるコロンビア学派によりその座を奪われることとなった(船津,2001)。

(注3) この時代、「社会科学」から政治学が独立したことを皮切りに、「アメリカ歴史学会」(1884年)、「アメリカ経済学会」(1885年)、「アメリカ政治学会」(1903年)、「アメリカ社会学会」(1905年)が設立された。「社会科学」は、内部的に分割、分離されていき、その結果 1909 年には「アメリカ社会科学協会」は解散を余儀なくされていくことになる。

(注4) クーリーは、自らの著作に『種の起源』(1859)を始めとするダーウィンの著作を引用していることから多くの知識をダーウィンから得ている。また、ダーウィンは自分の長男の幼児期の観察を行ない『幼児期の伝記的スケッチ』(Biographical Sketch of an Infant, Mind, Vol2)として発表している。クーリーの子どもの観察方法は、ボールドウィンとの関係で語られることが多いが、クーリー自身も記しているようにダーウィンからの影響もあったといえる (Cooley, 1929b:4)。

## 第2章 クーリーの社会学

### 第1節 クーリー社会学の特質

クーリーにおける社会とは、個人と社会との二分法により説明されるものでない。クーリーは、他の研究者が社会と個人のどちらかにウェイトをおき研究を試みたのに対して、個人ありきの社会であり、かつ社会ありきの個人という、個人と社会との表裏一体説を強調する。それらは、各個人のマインドに描かれる個人であり社会とされる。

クーリーによると、社会は「トーマス、ヘンリー、スーザン、ブリジットなどが『I』と名付けている一定の観念の接触や相互の影響としてマインドの中に存在する」(Cooley,1902:119)。個人と社会とは、オーケストラがさまざまなものと関連しあう音響から成り立っていることと同様に、マインドはさまざまな個体から成り立つ有機的なものであり、「絶え間ない会話の中に存在する」(Cooley,1902:90)ものである。個人と社会とは有機的な関係であるがゆえに、「社会は機械的な有機体ではない」(Jandy,1942:86)。

クーリーにおける現実社会とは自分をもその一部として含む社会であった。彼によれば、人間の歴史とは、コミュニケーションの絶えざる発展のなかにあり、社会とは、コミュニケーションの産物であり、それらは個人のマインドに反映されるものである。クーリーは、社会がコミュニケーションを通じて個人のマインドに描かれていくことを「客観的内観」(objective introspection)を用いてアプローチし「社会」を解明していったのである。クーリーは、個人と社会とが相互作用によって新たなものへと生み出されていく有機的なものであると考える。それらは個人のマインドに存在する個人と社会であり、「想像」により構成されるものである。彼は、このような視座からアメリカ社会を観察し、感受していたのである。

クーリーによると、それぞれの個人が、特有の社会にじかに気づいているということは、国家や時代といったように大きな社会全体に気づいている限りにおいてである(Cooley,1902:119)。すなわち、それぞれの個人のマインドに存在する社会とは、自分が所属している集団や似通った集団に所属しているひとのマインドにも同じように存在しているということである。もし、個人が社会よりも重要視されるのであれば、



個人がその個人において社会よりも実在するものとして捉えやすいからにすぎないからである。個人が社会よりも重要であるということは、「実在として五感に感じとられているだけで、ごく自然にかつ容易に思い浮べることができる」からである（Cooley,1902:7-8）。また、社会とされる集団や国家などが「有効な使いみちを教えられた想像力によって始めて理解される」（Cooley,1902:7-8）ことは、社会を物質的側面から捉え、複数個体の集団体としてみなしているからにすぎない。

クーリーによると、複数の個人と社会を程度の差はあるが別のものとして対照的に捉えてしまうことは、育ってきた伝統により思考様式が強化されているからである。それは、「単なる個人主義」（mere individualism）として、「二重の因果関係」（double causation）として、「原初的な個人主義」（primitive individualism）として、「社会能力観」（social faculty view）として表されている（Cooley,1902:43-47）。

「単なる個人主義」とは、個人的局面にもっぱら注意を向け、集団的局面をまったく二次的で付随的とみなすことである。「二重の因果関係」とは、社会と特定個人との間の力を分割させて、それぞれ別個の原因を想定することである。「原初的な個人主義」とは、社会性は個性化にともなって生じるもので、社会性を発達後半の付加的な所産とみなすことである。「社会能力観」とは、社会的とは個人のごく一部、それもあるかぎられた部分だけをさすことである（Cooley,1902:43-47）。

クーリーによると、個人と社会は、同じものの相補的な局面として密接に関連しており、発展も一方から他方への発展ではなく、両局面が低次の類型から高次の類型へと発展する。人間の心理的能力が社会的なものや非社会的なものとして区分できないように、人間は広い意味ですべてが社会的であり、そのすべてが共同生活の一部をなしている。

クーリーの最大の関心は、「個人と社会の調和原理の追求にあった」（大橋,1970:347）。クーリーが、個人と社会との表裏一体説を強く主張するのは、個人主義的な考えでは、個人と社会とを正確に捉えることができないと考えたからであった。クーリーは、マインドがさまざまな個体から成り立つゆえに、個人と社会とはマインドのうちに存在する。「想像」を通じて、他者のマインドにアクセスすることが、「客観的内観」アプローチである。そして、個人が「想像」できることやマインドを有することは、他者とのコミュニケーションが前提とされる。

クーリーにおいては、フェイス・トゥ・フェイスの関係から成る「親しい結びつき」

(intimate association) と協力とによって特徴づけられる「第一次集団」(primary group) が重視されている。遺伝により継承されるもの以外は、他者とのコミュニケーションにより生成し形成されると考えるクーリーにおいて、「第一次集団」とのコミュニケーションなしには、何の生成も形成もありえない。クーリーにおける個人と社会との表裏一体性は、「第一次集団」とのコミュニケーションから各個人に習得されることにより可能となる。それらは、クーリーが、「第一次集団」論を展開するなかで、「人間性」(human nature) の習得過程から見出される。

クーリーによると、「人間性」は個性的な側面である非社会的な傾性と能力、社会的な傾性と能力に二分される。「第一次集団」とは、個人の社会性と理想とを形成するうえで基本的であることで第一次的であり、「親密さ」を特徴として生み出された集団である (Cooley,1909:23=1970:24)。「第一次集団」においては、集団において共通性をもった「第一次理想」(primary ideals)が成長され、それが拡大したものとして「社会的理想」(social ideals) が形成されていく (Cooley,1909:33=1970:32)。それら全体をなすものが「人間性」である。

クーリーは「人間性」を三つの意味合いに区別する (Cooley,1902:31)。

第1は、遺伝により継承される「人間性」である。それは、人間の出生の存在を示す、細胞、衝動、才能を指す。しかし、それらは社会的発達要因としては現われることはない (Cooley,1902:31-32)。

第2は、「親しい結びつき」のある関係と「第一次集団」とにより単一に形成される「人間性」である。とりわけ、「人間性」は、家族、子どもの遊び仲間、近隣等などの集団との関わりの中で形成され、一般的な観念から特定な状況や制度から入りこんでくる。一般的に言われているように、遺伝により変更される社会性はその世界のすべてである。そこで形成されるものは、親しい集団であるがゆえに類似している。

第3は、「人間性」の長所と短所について議論される一般的ではない「人間性」である。クーリーは、明瞭な行為タイプと同一視しているので、第2の「人間性」とは異なる。それは、観念の一般性と特別な状況や制度から生じる要素として採取されるものである。例えば、吝嗇な人が、他の状況下においては金銭に対してとても気前のよい人であったとする。それは、状況が変われば、個人の考えや受け取り方に変化が現われていることを示している。つまり、「人間性」は、状況や制度が異なることで変化が見られるものであり、変化し続けるものである。

クーリーによると、人間は「人間性を生まれながらにしてそなえているわけではない」(Cooley,1909:30=1970:30)。それは、仲間同士のつながりをとおす以外に獲得するすべはなく、「第一次集団」の他者とのコミュニケーションを通して実現される。すなわち、「人間性」は、「第一次集団」とのコミュニケーションによって、快楽や食欲、復讐、力についての誇示などの「動物性」(animal nature)のものから洗練される(Cooley,1909:36=1970:35)。とりわけ、「第一次集団」の他者との間で生じる「共感」により訓練され、制御され、従わされるものとなり愛情や怒り、野心という「人間性」となる(Cooley,1909:36=1970:35)。クーリーにおける「人間性」とは、自分が属する集団の成員が何を考え、どのような感情を抱くかについて想像することによって成長していくことから、個人にマインドが生まれ、モラルがそなわったことを意味する。クーリーの見解の支柱となる個人と社会の表裏一体説は、「人間性」があって成立するものである。「人間性」は「第一次集団」といった他者なしには存在しない。

このように個人と社会とを二分法から捉えないクーリーにおいては、自我もまた同じく、社会あつての自我となる。自我は意識の前提ではなく、コミュニケーションから生じ、自我と同じく、他者に依存している。したがって、クーリーは「近代的自我」のイメージである孤立的な自我のあり方とは異なり、「ワレワレ」あつての「ワレ」とする自我の社会性を強く主張することになる。そして、彼は自我の社会性の一側面を「鏡に映った自我」(looking-glass self) 概念として表した。「鏡に映った自我」概念は、自我が他者とのコミュニケーションにより、その生成、形成、変化・変容することを明らかに示した概念である。

## 第2節 クーリーの社会学の展開

クーリーは、アメリカ社会学を築き上げた第一世代の一人として位置づけられている。彼の社会学は、「鏡に映った自我」概念と「第一次集団」論を中心に語られるが、身近な生活を通して育まれた彼の社会観は詳細に知られてはいない。

個人と社会とを一元的に考えるクーリーは、著書『人間性と社会秩序』(1902)において、焦点を個人に絞り、人間の社会性のなかに存在する社会を考えた。それはマインドに描かれる社会である。次いで『社会組織論』(1909)においては、観点を社会に移し、社会組織の相互作用の多様化および拡大について考察している。そして、

『社会過程論』（1918）では、社会過程の重要な側面の問題と、長年考えていた事柄を社会と社会生活の見解から明らかにしている。そして、『社会組織論』から約10年の時を経て刊行されたこの『社会過程論』は、クーリーの考えが集約されたものであり、3部作の完結作にあたる。

クーリーは、広大な概念をこの3部作として展開したが、彼の社会学理論の基礎の基礎や焦点は変わらないものであった（Schubert,1998:1-2）クーリーは、まず『人間性と社会秩序』においては自我理論を明確に述べている。「鏡に映った自我」概念は、「社会化を超えた自我」（oversocialized self）でも「負担となる自我」（unencumbered self）のどちらでもない。むしろ、「鏡に映った自我」は開かれた表現ではあるが、別個の自我イメージが他者との相互作用およびコミュニケーションを通じて形成されている。『社会組織論』では、社会秩序概念が、「第一次集団」、世論、制度、「デモクラシー」の概念で基礎づけられ、発展したものとなっている。クーリーにおける「デモクラシー」とは、単なる政治形態をたどったものではなく、生活類型が人類の社会性において徹底的に探求されたものとなっている。そして、『社会過程論』では、クーリーが「プラグマティック法」（pragmatic method）と呼ぶ社会変化が取り入れられている。クーリーにおける社会変化は、進化論の科学研究を通しては予測できず、合理性の手助けにならず、従属された歴史でもないとする。社会変化とは、絶え間なく起こっている行為問題におけるもろく、終わりなき相互作用過程である。それゆえに、公の永久的な調査および再評価が必要であることを展開している（Schubert,1998:2-3）。

クーリーは、この3部作でまず社会における個人の様相を描き、次いで個人が生きる社会がどのような形態、様相であるかについて描き、それが絶え間なく続く相互作用の繋がりであることを展開した。

このように彼の思想は、一側面を捉えただけではその真意はみえてこないものである。けれども、クーリーの自我論は「鏡に映った自我」の概念の考察と同一視されてきている。「鏡に映った自我」とは、第1に他者が自分をどのように認識しているかについての想像、第2に他者が自分をどのように評価しているかについての想像、第3にそれに対して自分が感じるプライドや屈辱などの「自己感情」からなるものである（Cooley,1902:184）。

クーリーは、「鏡に映った自我」概念において、自我が他者とのコミュニケーションなしには存在しえないことを明らかにした。彼は、『人間性と社会秩序』の第5章「社

会的自己」の冒頭において、「自我」(self)とは、「私」、「私に」、「私の」、「私のもの」といった日常で一人称単数代名詞として用いているものを意味すると述べている。「自我」は経験的自我(empirical self)と呼ぶものであり、日々の生活で理解され、確証されているものである。クーリーは、この自我の社会的局面を特に強調するために、社会的自我(social self)としてみなすとしている(Cooley,1902:168)。

以上で述べてきたように、クーリーはまず、ひとが日々の生活で経験される他者とのコミュニケーションにより自我が形成されていることを「鏡に映った自我」として示した。ここで「鏡に映った自我」として他者に映し出された自分は、他者のマインドを想像することによるものとされ、自己解釈による他者の引用であり、そこには直接的な他者は含意されていない。そして、プライドや屈辱などの「自己感情」が自我であることから、クーリーの「社会的自我」はあいまいであると批判されている。

しかし、クーリーの「鏡に映った自我」概念は、彼の自我論の一側面にしかすぎない。たとえば、クーリーの自我論に含まれる「想像」やマインドについては、『社会組織論』で包括的な展開がなされている。また、クーリーが自我を「自己感情」に求めたことは、彼が1908年に発表した『子どもによる自己言語の早期使用に関する一研究』においてその見解が詳しく示されている(注1)。

クーリーが「第一次集団」論において具体的に示す他者は、家族、子どもの遊び仲間、近隣集団等である(Cooley,1909:24=1970:24)。そして、「第一次集団」において、フェイス・トゥ・フェイスの関係によるコミュニケーションが繰り返されるなかで、「親しい結びつき」が結ばれていき、自分と他者と間に「共感」が生じるようになる。クーリーのいう「第一次集団」とは、個人の社会性と理想とを形成するうえで基本的な集団である(Cooley,1909:24=1970:24)。クーリーにおける「第一次集団」は、調和や愛情のみで統一する穏やかな集団を意味しているのではない。「第一次集団」における個人は、それぞれに分化、競争、適度な情熱をもっている。しかし、フェイス・トゥ・フェイスの関係によるコミュニケーションは、個人と個人とに「親しい結びつき」を結ばせる。そして、個人と個人とに「共感」が芽生えることで集団が統一する。それゆえに、個人の自我とは、多くの目的に対して共通したものを形成していくことから、「ワレワレ」(we)というものとなる(Cooley,1909:24=1970:24)。

クーリーにおいて「ワレ」と「ワレワレ」とは、等しくひとつのものとされる。「ワ

レ」意識とは、やや成長が進んだ段階に属するものである。クーリーによると、社会的もしくは「ワレワレ」という側面を除いて「ワレ」の側面だけを強調することは一面的である(Cooley,1909:6=1970:9)。「ワレ」は「ワレワレ」あつての「ワレ」である。クーリーは「ワレワレ思う、故にワレあり」として、「自我と社会とは、共通の全体がもつ両面として、ともに進行する」(Cooley,1909:9=1970:11)と述べている。

クーリーによると、「第一次集団」には社会的マインドの比較的単純かつ一般的な状態として、「集団性」(group nature)もしくは「社会の第一次的側面」(primary phase of society)が存在している(Cooley,1909:29-30=1970:29-30)。「集団性」は、あらゆる社会において類似しており、それは「第一次集団」に特徴的なコミュニケーションによって、さらに発達していくこととなる。ここでのコミュニケーションは、各個人がもつ第一次欲求を満ちし、「第一次集団」との生活を通じて、それぞれに所属する集団における共通性をもった「第一次理想」を形成していくものである。それが拡大し、「人間性それ自体の一部」となり、「社会的理想」を形成していくことになる(Cooley,1909:33=1970:32)。

クーリーが、「第一次集団」論において明らかにした「人間性」とは、「単なる人格だけではなく、個人が人生においてもつ社会的な理想もそこで発生させる」(前田,1999:76)ものである。その「人間性」とは、「動物性」レベルのものが洗練したものであり、それは、マインドの生成や他者における思考や感情についての想像を成長させることから、モラルがそなわったものを意味している。クーリーによると、「人間性」は個人に属するものではなく、「第一次集団」との人間関係を存続していくなかで、発展し、形成される。

そして、クーリーが「鏡に映った自我」でいう他者とは、他者のマインドを想像することで辿りつく他者とされている。クーリーにおけるマインドは、「第一次集団」とのコミュニケーションによって作られていく「人間性」なしにはその生成はないことを意味している。また、自我とされる「自己感情」は、「人間性」のひとつとされる感情である。

クーリーの「鏡に映った自我」は、その概念要素のみで理解してしまうと、彼の主張する「社会的自我」があいまいなままになってしまう。しかし、クーリーが、「鏡に映った自我」で示しているマインドや「自己感情」についての彼の考えまで辿っていくと、そこには「第一次集団」とのコミュニケーションが前提とされていることがわ

かる。それゆえに、彼の自我論のひとつである「鏡に映った自我」とは、間違いなく社会性を有していたことなる。

クーリーは、『人間性と社会秩序』では個人に重点をおいて個人と社会について考察している。そして、個人と社会とが表裏一体であるという見解は、社会に重点を置き描かれた『社会組織論』とを重ね合わせることによって、その社会性がより明確化されていくことになる。

### 第3節 クーリーの社会学のアメリカ社会学への影響

クーリーが、アメリカ社会学に残したものは、「鏡に映った自我」概念や「第一次集団」論であると言われる。しかし、それだけではなく、彼は南北戦争後の殺伐とした時代のなかで、アメリカ社会の現実を見て感じとり、その事実を近代的コミュニケーションや「デモクラシー」により具体的に明らかにしている。

クーリーの生きたアメリカ社会は、目まぐるしい発展を遂げていた。彼は、コミュニケーションが人間関係を存在させ、支え、発展させるメカニズムとして考察している。クーリーは社会を有機体として捉え、社会有機体が「人間性」の原理に従って運び込まれることを繰り返し説いていた。

クーリーは「第一次集団」論においてコミュニケーションを「第一次的なコミュニケーション」と位置づけた。そして、情報メディアの発達に伴い進歩していくなかで彼がみた近代的コミュニケーションは、「第一次集団」のコミュニケーションが拡大したものと考えられた。クーリーは、近代的コミュニケーションのうちに、個人の内面や意識生活に効果をおよぼす原因となるものと個人の思考が目に見えたかたちとして存在するものを見出した (Cooley, 1909:64=1970:58)。

クーリーによると、話される言語は時間の経過とともに忘れられるが、筆記というひとつのコミュニケーションの発達により保存が可能となる。書き表わされた言語は書き残されているということにより、再度それについて思考することを可能にする。それがコミュニケーションにおける「保存」である。また、情報メディアの発達は多くの人に分け隔てなくあることを伝えることを可能にする。それがコミュニケーションにおける「普及」である。クーリーは、近代的コミュニケーションという新たなコミュニケーションの展開のなかに、「保存」と「普及」を読みとったのである

(Cooley,1909:76=1970:68)。

他方、クーリーにおいては、絵画、彫刻、音楽、建築という芸術もコミュニケーションとされる。それは非言語的なコミュニケーションであり、筆記や印刷の発達ももたないコミュニケーションである。芸術には、その時代の高貴な感情や向上心が具現化されている。たとえば、ひとは、ゴッホの肖像画を見たとき、そのかたちや表情からセンチメントを感じる。芸術は、各個人に影響をもたらす、「思想同様に、蓄積されうる」(Cooley,1909:78=1970:69)のものであり、センチメントが育つシンボルとなる。クーリーによると、芸術を通じたコミュニケーションは、同じ興味を抱くもの同士を交流させ、精神的に結びつきやすい状況を作り出す(Cooley,1909:76=1970:68)。芸術は時間を越えて人々とのコミュニケーションを可能にし、同じく同時代に生き、共有し合える個人と個人とのコミュニケーションを可能にする。

クーリーによると、「保存」と「普及」からなる近代的コミュニケーションは、広範囲にわたり多くの人々に共通の感覚をもつことを促進させた。印刷機の発達は、新聞というコミュニケーションを生み出した。新聞の普及は、ひとに隣人や自分たちが住む地域のことよりも、海を越えた他の国での出来事が身近なものにさせ、さらには、社会的接触、空間の拡大、時間の迅速化をもたらした(Cooley,1909:81-83=1970:72-73)。

けれども、新聞の普及は良い面だけをもたらしたのではない。新聞には、言葉の氾濫や表面的な感情を訴える機能がある(Cooley,1909:84=1970:74)。新聞はゴシップ性を拡大させる。それは、多くの人々が同じ冗談で笑うことやスポーツに対して同じように興奮し、同じ対象に対して共有できる仲間がいることを確認させ、人間的な道徳性の基準を補強していく。ゴシップの拡大は、ひとに「広範な社会性と共同体の感覚を促進」させることになる(Cooley,1909:84-85=1970:74-75)。ここには、近代的コミュニケーションの「拡大」、「活発化」と「拡大」と「活発化」によってもたらされる「個性」の問題が指摘されている。

他方、クーリーによると、都市では「選択」、農村では「孤立」といったそれぞれの個性が育つ。近代的コミュニケーションは、「選択」を育てるが、「孤立」は「選択」に侵されていく。都市には、個性を育てあげる機能や特殊な能力に有効な機能があり生産的な独創性がある。他方、農村には、環境や自然に対してフェイス・トゥ・フェイスに関わっているため、都市のようなゴシップ性はない。農村の人びとは、都市の人びとのように、新たなコミュニケーションを存続することは不可能であるが、都市



の人びとが持ちえないものを有している (Cooley,1909:94=1970:82-83)。

クーリーによると、近代的コミュニケーションは、同じ傾向や興味を抱くひととひととの交流を促進させ、精神的結びつきやその特殊性を励ましあう状況を促進させる (Cooley,1909:91-92=1970:80)。他方、それは、個人の思考と感情に適当な心理的習慣や表面的な親切と適応性をもたらし、個人を同じような人間であろうとすることに熱心にさせた (Cooley,1909:93=1970:81)。それが、クーリーが警告する近代的コミュニケーションの「皮相性」と「精神的緊張」である (Cooley,1909:98=1970:86)。

クーリーは、近代的コミュニケーションが発達するアメリカ社会に新たな集団や組織の形態を見出している。それが「デモクラシー」である。クーリーにおける「デモクラシー」は、「公衆意志」(public will)により成し遂げられ組織的な世論の支配を意味する (Cooley,1909:118=1970:100)。

クーリーによると、「大衆はいつも誤っている」ということは真実ではない (Cooley,1909:153=1970:127)。大衆は、組織や小集団が不安定であるゆえに、群集化したものにすぎない。組織が安定していれば大衆が群集化することはない。組織や小集団といったものは、「もっとも原始的な社会を別にすると、どんな社会も、多かれ少なかれはつきりといろいろな階級から構成」される (Cooley,1909:209=1970:168)。そして、組織、階級を統合しているものが制度とされる。制度は、目に見える慣行や象徴をまとっているため、独自の独立した存在と考えられることが多いが、究極の性質においては世論と異ならないものである。制度は、「公共心の明確で確立した側面」として、「マインドの習慣や行為の習慣として個人のなかに存在する」 (Cooley,1909:314=1970:246)。

そして、組織、階級、制度を含んだものが社会構造とされる。社会構造のかなり明確で、永続性をもった部分は「社会類型」と呼ばれる (注2)。「社会類型」とは、動物世界の属、種、変種といった概念と類比すものである。それは関連性をもった体系、秩序をもって存在し、変化や相互の競合、繁栄と滅亡からは免れないものである。それは柔軟性に富むこともあるし、硬直化することもあり、様相が相互に重なり合うこともあるし、重なり合わないこともある。クーリーによれば、人びとは生活を個々のものとして認識することを忘れずに、類型、過程、組織として認識することを学ばなければならない。問題を正しく理解するには、個人を全体によって、また、全体を個人によって解釈できなければならない (Cooley,1909:22=1970:23)。

クーリーは、当時のアメリカ社会を「デモクラシー」として描いたのである。そして、「デモクラシー」を成し遂げる「公衆意志」の背後にある指導力とは、「第一次集団」にあらわれる「より持続的な性格をもつ人間性そのものである」(Cooley,1909:419=1970:326)。クーリーにおいて、「デモクラシー」の原型は「第一次集団」にある。より厳密にいうならば「第一次集団」の他者とのコミュニケーションにより形成されたものである。彼が抱き理想とする集団、組織、社会は「第一次集団」が拡大したものであった。けれども、実際に彼が生きたアメリカ社会では、家族や教会に解体が訪れていた。クーリーはその危機に直面したがゆえに、「デモクラシー」とキリスト教が成功をおさめていないことを認めている。

クーリーによると、「人間性」は仲間同士のつながりをとおして獲得されるものであり、高頻度に変化しやすいものである (Cooley,1909:30=1970:30)。それは消えてなくなるものであり、ある状況下においてはコントロールされるものである。クーリーは、近代的コミュニケーションの発達や「デモクラシー」が成功をおさめていないアメリカ社会では、「第一次集団」で育まれる「人間性」がコントロールされていることに気づいていた。

クーリーによると、「自我と社会とは、共通の全体をもつ両面として、ともに進行する」(Cooley,1909:9=1970:11)。クーリーは、目まぐるしく移り変わるアメリカ社会という現実を個人と社会との相互関係から見出していた。その始まりは、「親しい結びつき」と「共感」を特徴とする、家族での相互作用、親しい友達との相互作用、子どもの遊び仲間に見られる相互作用が存在する。

そして、晩年期のクーリーは、「農村社会調査へと適用される生活研究方法」(1929)において、これまでの研究には生活を知覚するものが不足していることを指摘している (Cooley,1929a:331)。クーリーは、量的な方法論とは方法的には問題はないが、想像的ではない観察は表面的とする。ひとの顔の表情、ジェスチュア、言語などの特徴的社会的行為は、パターン化された現象であり、ゆえに厳密な科学の分類の手順で見落とされていることを指摘する (Cooley,1929a:332)。クーリーは、ひとが日々、認知しているものの背後には、想像を通じての「目にみえるもの」と「聞こえるもの」との混合物があり、マインドに帰結している心的プロセスがあるとする。そして、人間の知識にとって現実的な基礎は、共感もしくはドラマティックな認識であるとする (Cooley,1929a:338)。

このようなクーリーの思想には、自我の社会性を主張し、「自己感情」に自我の根源を見出したことが伺えるであろう。この時代、心的なものは科学的に説明できないものとされていたがために、感情は影のような存在のものとしてみなされていた。けれども、彼の見解は、1970年代を機に現れた感情社会学の分野においては重要な意義をもつこととなる。第二世代と位置づけられるシカゴ学派とのクーリーの位置づけにより、「自己感情」から自我を見出す見解は後のシンボリック相互作用論者に影響を与えたといえよう（注3）。

クーリーにおける自我の居住場所となっているプライドや屈辱といった「自己感情」は、不安定感、低評価、誠実感、不誠実感により自我のありかたを異ならせる。自我と対立する「自己感情」は、自律的な自我の現れであるがゆえに、自立的で主体的な自我を形成することとなる。クーリーは、アメリカ社会学が生物学的社会学から心理学的社会学へと移行している時代に、とりわけ感情の在りかたに焦点を当てていたのである。彼の感情を重視する見解は、彼の生きた時代では科学的検証が不可能とされていたが、感情社会学なる新たな研究分野が到来している今日では、重要なテーマであるがゆえに彼の理論は生かされてきている。

（注1）クーリーは、子どもが人称代名詞をどのように習得していくのか、それらの言葉によって何を意味しているのかについて興味をもち、重要な問題であるとした。1883年から自分の子どもを対象に（Rutger Horton, Margaret Horton, Mary Ellizabeth）観察を開始し、主に3番目の子どもであるエリザベスの観察記録を“A Study of Early Use of Self Words by Child”（1908）に発表している。クーリーによると、子どもが最初に用いる人称代名詞とは「I」（私は）である。まず、子どもは他者を真似る方法で言語を用いる。この時期の子どもは、他者に映し出されるものをそのまま受けとっているだけで、誤った方法で言語を使用し、その言語が意味するものもわかっていない。そして、子どもは生後22ヶ月頃に達してから「I」についての正しい使用方法を解かり始め、生後25ヶ月頃に達すると「I」を熟語（I don't know等）として使い始める。クーリーによれば、子どもが「I」を熟語として使用し始めることは、「I」の意味を習得したことであり、代名詞が意思表示と関係づけられたことである。それは、子どもによる自己主張である（Cooley,1908:245）。子どもは、約3年弱の期間に渡り人称代名詞を習得していく。

(注 2) クーリーにおける「社会類型」とは、パーソナリティー、政治構造、宗教、階級、家族、芸術、言語、コミュニケーション、協同、競争などといった全体を分析するためや、記述のために細分化しようとするときに用いられるものである。

(Cooley,1909:22=1970:23)。

(注 3) 最近の研究動向では、クーリーの「自己感情」に関するものおよびクーリーについての再評価するものが展開されている、とりわけ、シェフは、クーリーが「鏡に映った自我」概念で示したプライドや屈辱などの感情に焦点を絞って展開している (Scheff,2003,Scheff,2005)。さらに、他方で、ジェイコブスは、長年に渡りクーリー研究を行っている (Jacobs,1979,2004,2006)。また、シューベルトによってもクーリーの再評価が試みられている (Schubert,1998)。さらに、日本においては、大西がクーリーとミードの比較から自己論の構図を描いており (大西:1991)、磯辺が「成長する生命体—C・H・クーリーの自己論再訪」を執筆している (磯辺:2006)。また、船津は、クーリーの再評価の動向をいち早く見出し最近では、親密性の再考において、クーリーについて論じている (船津:1999,2006)。

### 第3章 クーリーの社会的自我論

#### 第1節 「鏡に映った自我」概念

##### ——「想像」と「自己感情」のコミュニケーション——

クーリーが、最も多くのもを学んだのは心理学者のW・ジェームズからであった(Coser,1978=1981:77)と言われているように、彼におけるジェームズの影響は多大なものであった。ジェームズは、自我に関して、「私が何を考えているときでも、私はそれと同時にいつも私自身、私の人格的存在を多少とも自覚している。また同時にそれを自覚しているのも私である」(James,1892=1992:245)と述べている。このように考えるジェームズは、自我には「知られるものとしての自我」(self as known)である「客我」(me)と「知るものとしての自我」(self as knower)である「主我」(I)があるとする(James,1892=1992:245)(注1)。

ジェームズによると、「客我」は、「大きくなり、栄えれば得意になり、小さくなり、減少すれば落胆する」ものである(James,1892=1992:246)。「客我」とは、最広義には、ひとが「わたしのもの」と呼ぶすべての総和である。それは、身体や心的能力のみならず、衣服、家、夫、妻、子ども、祖先、友人、名声、仕事、土地、通帳等といったものすべてが含まれる(James,1892=1992:246)。

ジェームズは、「客我」を成り立たせている構成要素に「物質的客我」、「社会的客我」、「精神的客我」があるとする。そして、これらの構成要素が引き起こす「自己感情」や情動が「自己評価」とし、それらを促す動作が「自己追求」と「自己保存」とする(James,1892=1992:247)。

「物質的客我」は身体がその核心をなしている。これに次ぐものが衣服、家族、家である。ひとは、美しい身体をもちそなえていても、汚い衣服を身に纏っていれば、嫌悪を示し、家族に不幸が起これば悲しみを、家族が悪事を働かせると恥を感じるようになる。また、訪問客が家を侮辱すれば、許しはしない。ジェームズにおける「物質的客我」とは、生活上の実際的興味と結びついた本能的な選択対象とされるものであり、盲目的な衝動を有しているものである(James,1892=1992:247-249)。

「社会的客我」はひとが他者から受ける認識である。最も特異な「社会的客我」は、「愛するものの心の中にある」(James,1892=1992:250)。それは個人の有機的感情に

よってのみ測ることができるものである。ひとは、この特殊な社会的自我が認められない場合には、自分の存在が無いように思われ、認められた場合にはその個人にとっての満足は無限のものとなる。ひとが抱くイメージは、いくつかの明瞭な集団に分けられるので、他者に対して抱くイメージと同じ数の「社会的客我」が存在する (James, 1892=1992:250)。その結果、いくつかの自我に分離することになる。それは、ときには相互に完全に調和のとれた分業となり、ときには相互に調和しない分裂となる。

ジェームズによると、「名誉」、「不名誉」といった名称は「社会的自我」のひとつであり、自我分離のひとつの結果である。それは、社会の職業に求められるイメージに一致するか否かによる「名誉」と「不名誉」との分離である。たとえば、軍人は名誉のために戦い、命を失うことが要求される。政治家や裁判官は名誉のために、差し障りもない金銭関係をもつことが許されない。それは一個人としては気の毒に思い、同情もするが、公人としては容赦するわけにはいかないといったことにもなる (James, 1892=1992:249-252)。

「精神的客我」とは、経験的自我として、自分の意識状態、自分の心的能力、諸傾向を具体的に集めた全体を意味する (James, 1892=1992:252)。この集合体は、どのような瞬間であっても、その瞬間の自分の考えの対象になる。そこでは、同じく情動が喚起される。ひとが自分自身を考える主体と考えるとき、「客我」のすべての成分は自分以外の所有物のように思われる。なぜならば、ひとが知っている自我の核心や自分の生命の聖域は、「一定の内的状態がもっている能動感」 (James, 1892=1992:252) だからである。ひとはどのような状態にあらうとも、そこには能動的に感じられる性質を有している。それが「精神的客我」である (James, 1892=1992:252-253)。

ジェームズは、「客我」を成す構成要素を3つに分類し、この構成要素によって引き起こされるものが「自己感情」であり、それが「自己評価」となるとしている。そして、「自己評価」に次いで、構成要素が促す動作が「自己追求」と「自己保存」である (James, 1892=1992:253-258)。

「自己評価」には、「自己に対する満足」と「自己に対する不満足」の2つがある。ジェームズによると、「自己に対する満足」の「自己評価」を表すものには、自慢、自負、虚栄、自尊、尊大、虚飾などがある。「自己に対する不満足」の「自己評価」を表すものには、謙遜、卑下、当惑、自疑、羞恥、屈辱、悔恨、不面目感、失望など

がある (James,1892=1992:253)。ジェームズにおいて、「客我」を成す構成要素が引き起こす「自己感情」とは、ひとの成功や失敗、ひとが実際に世の中で閉めている位置の高低を表している (James,1892=1992:254)。

ジェームズにおける「自己追求」と「自己保存」とは、いずれも根本的な本能的衝動が多く含まれているものである「身体的自己追求」、「社会的自己追及」、「精神的自己追求」に分類される。「身体的自己追求」は、最広義において「物質的客我」の発達を求めるものとされる。「社会的自己追及」とは、「物質的自己追求の衝動の中で社会的目的を達成するものに役立つものに行なわれる」ものである。「精神的自己追求」とは、キリスト教徒が地獄に陥ろうとしない願いをもつように世間一般に通用しているものである (James,1892=1992:256-258)。

ひとはさまざまな自我をその価値に従い階層的段階に配列している (James,1892=1992:266)。自我の配列は、「身体的客我」を底辺とし、「身体的物質的客我」と「社会的客我」を中間に、「精神的客我」を頂上とする階層的段階となっている。

そして、この配列を決定しているものが「自尊心」である。ジェームズによると、「この世の中におけるわれわれの自己感情は、何になり、何をすることに自らを掛けるかにまったく依存し、われわれの現実とわれわれの想像する可能性との比、すなわちわれわれの願望を分母とし、成功を分子とする分数に決定される」 (James,1892=1992:260)。ここでの「自尊心」は「自己感情」であり、自分で支配できるものとされる。

ジェームズによると、「人間の経験的自我の核心は社会的な種類の自我であるにもかかわらず、その自我は、唯一の適切な友を理想的世界の中に見いだし得る」 (James,1892=1992:268)。すなわち、「客我」には他者が存在している。それゆえに、彼は「完全な社会的無我はない」という (James,1892=1992:269)。ジェームズは「客我」を検討することにおいて、自我の社会的性格を明示し、「自我は他者の認識とのかかわりにおいて形づくられる」 (船津,1983:34) と考えたのである。

他方、ジェームズは「主我」については、「客我」ほどには詳細に考察していない。ジェームズにおいて、「主我」とは「考える主体」である (James,1892=1992:272)。

「主我」は、ある瞬間に意識されるものであるため、その瞬間に把握されなければならない。すべての合成物のように成長する「客我」に対して、「主我」は「考える主体」

としての役割を演じている。

ジェームズによると、自我についての意識はひとつの流れである。「主我」は過去に生じた記憶として残存し、対象化され「知られるものとしての自我」である「客我」となる。「主我」とは、「主我」について考えるそれ自身が「考える主体」である (James, 1892=1992:301)。したがって、ジェームズにおける「主我」は、経験的に極めて捉えにくいものであり、自我の社会性がそこには組み込まれてはいないことになる。

ジェームズの見地から外部世界とのさまざまなやりとりを通して形成される自我概念を引き出したクーリーは、「鏡に映った自我」という概念によって、彼独自の自我論を展開した (Cooley, 1902:184)。クーリーによると、ひとは、自分の顔を自分で見ることはできないが、鏡を見ることにより自分の顔を見ることができると。同じく、ひとの自我も自分だけではわからない。他者という鏡を通して知ることが可能となる。

クーリーは個々ばらばらといった孤立したものとしての自我はないとする。クーリーの「鏡に映った自我」による自我の決定的特徴は、他者とのコミュニケーションからなる自我の社会性と「自己感情」からなる自我の内容にある。自我は「鏡に映った自分、過去における他者の内省」 (Cooley, 1902:184) である。

鏡に映し出された自分の顔や容姿などは自分自身である。そこに映し出された自分により自分自身を知ることができる。そこで、クーリーは、鏡を他者に置き換え、他者が自分を映し出す鏡とする。ここでの他者とは、他者が自分に対してもつ認識と評価である。他者が自己の外見、マナー、目的、行為、性格、友達等に対して行なう反応は、他者のマインドを想像することで理解される (Cooley, 1902:209)。クーリーは、他者の態度や行為といった外見に表される反応には、故意的なものが含まれているとしてそれを重視しない。

また、クーリーは、ジェームズの自我についての考えに依拠していながらも、ジェームズのように「主我」(I) と「客我」(me) とに分類した自我論を展開していない。クーリーにおいては、「主我」(I) と「客我」(me) は、「わたし」、「あなた」などの人称代名詞という日常語に置き換えられる。彼が、自我の社会性を強調するときの自我とは、心理学者が経験的自我と呼ぶところにある。それは、ひとの日々の生活において、観察され、理解され、確証される自我を意味する (Cooley, 1902:168-169)。

すなわち、心理学者が経験的自我とするところは、クーリーにおいては日々の他者



とのコミュニケーションという経験により形成される自我ということになる。それゆえに、クーリーにおいては、自我形成における他者の存在は疑いのない事実となる。そこで、他者の存在なくしては自我の形成も変化・変容もないといった事実を「鏡に映った自我」として表したのである。

クーリーは、他者を自己の「想像」によって捉え、「自己感情」が自我であると考え、自我をこのような他者の「想像」と「自己感情」によって構成されるという発想がクーリーの社会的自我論の特徴である。けれども、この独自性が批判的のようになってきている。

すなわち、他者の「想像」は、自分が恣意的におこなうものであるので、自己本位的な他者理解であるとされるかもしれない。他者が鏡と異なるところは、同じ内容の会話や行為でも他者が異なればそこでの他者反応は異なってくることである。しかし、クーリーは、自我を捉える際に他者の反応である行為や態度を重視しない（Cooley,1902:209）。クーリーは、他者についての「想像」を本質的な要素であると強調する。クーリーにおける他者の自分に対する反応とは、他者のマインドを「想像」することで辿りつく反応である（注2）。「想像」は他者とのコミュニケーションを通して喚起される。「想像」はすべての他者に対して同一ではなく、他者が異なれば当然異なってくる。

そして、他者の行為や言動についての自分の他者に対する「想像」と自我とがうまく適合しない場合には、十分な判断ができず、自分自身の行為も有効な過程を形作ることができない。それは、自己と他者とのコミュニケーションがうまく進行せず、コンフリクト状態にあるからである。しかし、コンフリクトは、自らの「想像」を再構成させ、新たな解釈パターンを形成することで回避される。すなわち、「想像」は他者との関係により生じ、作りあげられ、再構成が可能なものである。「想像」は、他者と関連して作りあげられた内部経験である。それは、経験的世界から隔離されるものではなく、現実の社会関係から成る相互主観的なコミュニケーションによるものである。「想像」は、他者とのコミュニケーションにより構成され、他者のマインドにアクセス可能な「社会の確固たる事実」であることになる。

他方、クーリーのいう「自己感情」は単なる無意識による感情ではない（Cooley,1902:184）。それは、社会的活動を刺激し、全体をまとめる重要な役目と結びついて進化する感情であり、経験によって規定され、発展していく感情である

(Cooley,1902:171)。また、「自己感情」は、人間において最も初期の段階から現われる感情であり、他者とのコミュニケーションおよび相互作用によって変化・変容が可能な感情であり、新たな自分を気づかせる要因となる感情である。それは他者と結びついた感情である。

「自己感情」には、一見、社会性がないもののように思われる。クーリーは、「自己感情」に本能的なものが含まれていることを認めており(Cooley,1902:170)、自分が「社会的自己感情を過大視しすぎている」と考えられるかもしれないと述べている(Cooley,1902:208)。けれども、クーリーは、「自己感情」が社会的活動を刺激し、全体をまとめる重要な役目と結びついて進化し、経験により規定され、発展していく感情である(Cooley,1902:170)として、そのような「自己感情」のうちに自我を見出したのである。このことは、クーリーの行なった子どもの観察記録から引き出されている。

クーリーは、他方で、J.M.ボールドウィンの見地から、パーソナリティが社会的観点においてのみ研究しうることを学んでいる(Coser,1978=1981:77)。ボールドウィンは、自我の社会的起源を重視し強調している。かれは子どもの発達における一連のパイオニア的研究のなかで、「パーソナリティは社会的関連においてのみ研究しうる」と(Coser,1978=1981:77)を強調した人物である。

クーリーは自分の子どもを対象にして自我が発達していくプロセスを観察することを試みた。クーリーによると、生後まもない子どもには、言葉にならないプライドに似た感情が生じている。それが自我の芽生えである。この感情は、人称代名詞の習得とともに明確に他者に伝えることを可能にする(Cooley,1908:230)。「私は」といった人称代名詞は、身体的なものを意味するのではなく、行為や自己主張する感情を伝える手段である。子どもは、自分の願望、要求等を他者の心に銘記することを目的として人称代名詞を使用していく。それは、話し手が意識している社会的手段として、自己意志を主張しているという点において社会的である。クーリーにおいて、人称代名詞とは、話し手が意識している社会の媒体において、自己を主張する最も本質的な社会的手段とされるものである。

そして、「自己感情」は人称代名詞の習得プロセスで生じてくる感情である。正しく人称代名詞を用いることのできない子どもは、自己の主張、感情を音(言語)と発することで習得していく。人称代名詞は、日常生活範囲で起こる強い感情とともに確立される。すなわち、人称代名詞は自己の主張である「自己感情」と関係して用いられ

る言語である(Cooley,1908:232)。

人称代名詞の習得過程に「自己感情」が顕著に現われてくることと同じく、「自己所有化」(self-appropriation) 行為においても「自己感情」が生じている。クーリーは、自分の子どもの観察を通じて「自己感情」の第一の芽生えが、玩具や哺乳瓶をコントロールする努力と結びついていることを見出している (Cooley,1902:177)。

「自己所有化」行為は、主に人称代名詞のひとつである「私の」(my) の習得と結びついている。クーリーの子どもは、生後 23 ヶ月頃になると「私の」といった人称代名詞を正しく用いるようになり、その後、「私のナイフ」(my knife) のように、行為と関係づけて用いられるようになる(Cooley,1908:243-244)。

とりわけ、「私の」、「私のもの」といった人称代名詞は、他者と争うなかで習得されていく。遊んでいる時に、自分の玩具を他の子どもに取られると、玩具を取られた子どもは、玩具を取った子どもに対して「私の」、「私のもの」と発言し、その玩具を取り返そうとする。これが「自己所有化」行為である。子どもにおける「私の」といった表現は、他者に対する明確な自己主張である。それは、「自己所有化」行為という「目的的活動」である。そこに「自己感情」が生じている。「自己所有化」行為は、特に他者とのコンフリクト関係にある場合に最も強く現われる。クーリーは、日常生活において「常に一定のコンフリクトにさらされていることを疑うことなく認めていた」(Schubert,1998:21)。コンフリクトは、自己に矛盾が生じたことから生まれるものであり、それが自我の自律性、積極性を生み出すものとなる。

「自己感情」は、他者の注意を引くことと関係しており、他者をコントロールするという社会的欲求があるゆえに、自我に関して非常に大きな役割をもつ (Cooley,1908:232)。クーリーによると、「本能的な自己感情は、個人の特別な活動を刺激したり、統一する重要な機能と結びついて進化してきた。それは、主に、力を働かせる観念、自分が物事の原因であるという観念と、また、マインドと他の世界との間のアンチテーゼを強調するような観念と結びついている」(Cooley,1902:177)。

クーリーは、「自己感情」を自らの経験を通じて知ることが可能な感情とする。「自己感情」は、言い習わされたものとしては理解できる感情でもなく、一般的な共通語としても存じていない。しかし、他の種類の感情とは明らかに区別される。それは怒り、恐怖、悲痛といったものである (Cooley,1902:175)。クーリーのこのような見解は、ジェームズにおいて、「自己満足や失意それ自体の感情は (emotion) は唯一のも

のであり、それぞれが価値のあるものとして、激怒や苦痛のような原初的感情として分類される」(James,1892:307)ことを評価し、それに依拠して、人間特有の感情があることを考えていたことに由来している。

ジェームズとクーリーは、「情緒ではなく、むしろ活動力か原動力がある」(Wiley,1994=1999:173)自我をもっとも内側の層から出発して考え、自我の心理的な部分から身体、他者、物理的財産へと向かっていた。しかし、クーリーは、ジェームズの見解について社会的本質の識見を備えているが、社会全体と個人との組織的概念を発展させていないという。それは個人的であり、神秘主義的な社会であると批判している(Jandy,1942:110)。

クーリーのいう「自己感情」は、他者とのコミュニケーションといった経験により呼び起こされるものである。クーリーが言うところによると、「自己感情」とは「塩味がどのようなものであるか」、「赤色がどのようなものであるか」(Cooley,1902:172)などといったものであり、ひとが人生を歩む過程での経験を通じて思い起こすことによって、その定義づけが可能な感情である。

クーリーにおいて、「自己感情」は、「『私』という固有の領域の感覚とその領域に生じる独特の感情である」(磯部,2006:35)。「自己感情」は他者とのコミュニケーションなしには生じることはない。クーリーは、自我に関して社会学的視点をもちこみ、自我の社会性を明確化したのである。

## 第2節 クーリーの社会的自我論の問題——ミードによるクーリー批判——

先述したように、クーリーによれば、個人は社会あつての個人であり、社会は個人あつての社会である。このように主張するクーリーは、デカルトの「ワレ思う、故にワレあり」の表現は不十分であり、「ワレワレ思う、故にワレあり」が正しい表現であると主張する。

「自己意識」が基本的であり、「社会意識」に先行するものであるという考え方が主流であった時代に、クーリーは「ワレワレ」という側面や社会的側面を強調し、それを除いて「ワレ」意識を強調することは一面的であり、個人的であると考えた。クーリーによれば、「ワレ」意識は、成長はある程度進んだ段階で見られてくるものであり、それは他者とのコミュニケーションおよび相互作用によって培われてくるものである。

哲学者であり、社会心理学者でもあるミードもまた、「自我はもはやデカルトの意識過程ではない」と考える(Mead,1930:696)。ミードもクーリーと同じく、自我は他者との相互作用およびコミュニケーションから生まれると主張する。従って、ミードは、クーリーの見解に対して、彼の思考の柔軟さがあると高く評価する。

クーリーは、オーケストラがさまざまな楽器から音を奏で、ひとつのハーモニーを作り出すことと同じく、マインドが諸々の個体から成立する有機体全体であるとする(Cooley,1909:3=1970:6)。そして、クーリーが意味するコミュニケーションとは、次のような事柄をさしている。

人間関係が存在し、発展するメカニズム、すなわち、マインドすべてのシンボルとそれらのシンボルを空間を越えて運び、時間を越えて保存する諸手段である。…これらすべてのものが一緒になり、実際に複雑に結びつくことで、ひとつの有機体全体が作り上げられる。そして、その有機体全体は、人間の思考という有機体全体に対応している。マインドに成長するすべてのものは、その成長のなかに外的な存在をもっているのである。…コミュニケーションがなければ、マインドは、真実の人間性を発達させなかったし、人間でも動物でもないような異常な記述できない状態にとどまるしかない(Cooley,1909:61-62=1970:56-57)。

ミードは、クーリーのマインドとコミュニケーションについての思想のなかに、社会的マインドと社会の有機的な構造や過程との関係が示されているとする(Mead,1930:699)。クーリーが依拠する「通常の心理学」(ordinary psychology)は、「マインドの意識過程が生理学的個人の生きた過程に対応するように、マインドの社会的過程は社会の生きた過程に対応する」(Mead,1930:699)。それゆえに、クーリーにおける「自我」は、他者がその個人に対して抱く観念を想像することから生じるものであり、それと相補的に、他者に対する観念が他者の自我へと組織化されるものとなる(Mead,1930:699)。

ミードによると、タルドは「個人がコミュニティの態度や様式によって規定されるような心理学的メカニズムを求め、それを模倣に見出した」(Mead,1930:699)。けれ

ども、タルドが見出した模倣とはメカニズム的には不十分なものであり、「個人の性格と集団の性格との類似性を指す」(Mead,1930:699) だけのものになってしまった。また、ボールドウィンは、心理学的に可能な模倣のメカニズムを循環反応によって仕上げようとしたが成功するに至らなかった。さらに、ジェームズの自我についての見解は、「自我が社会的環境を超えて広がっている」(Mead,1930:699) ことを示したものであり、他者とのコミュニケーションによる自我の形成を示すものではなかった。

けれども、ミードによると、クーリーは、意識のなかに社会過程が進行し、そのなかで自我と他者が生じることを見出している。ここにおいてタルド、ボールドウィン、ジェームズよりも、クーリーの学説の優れた点があるとする。そして、クーリーにおける、他者の自我に対する作用と自我の他者に対する作用は、マインドのなかにおける自我と他者との相互作用に他ならない (Mead,1930:700)。このように、クーリーが自我と他者とを経験の同一平面の場に確定したことは、社会心理学の思考の進歩にとって大いに重要であるとして、ミードはクーリーの学説の貢献について認めている (Mead,1930:700)。

しかしながら、ミードはクーリーの自我に関する理論、とりわけ「想像」と「自己感情」についてはきびしい批判を加えている。ミードの立場からすると、クーリーのように、他者を「想像」によって理解することや「自我」を「自己感情」のなかに見出すのでは、他者が自我形成に影響を与えていることを具体的に明らかにすることができないことになる。

ミードによれば、クーリーの見解における「社会」は、自分自身をも含む社会であり、彼自身の「人間性」によって生み出された社会である。その方法は、ソロー、エマーソン、ルター、トマス・ア・ケンピスたちの「構造の統一性を感じ取り、それを思考によって証明し、得られた自らの考えを編成する」(Mead,1930:694)客観的内観アプローチである(Mead,1930:693)。クーリーにおける「社会」は意識の事柄となってしまう。このことについて、ミードは次のように述べている。

人間の自分自身についての意識は、自分について他者たちが抱いているとその人が考える観念を内観したものから生み出される。そこでは、他者は、人が抱く他者の「想像」のなか存在し、そこにおいてのみ、他者たちはその人に働きかけるも

のとなる。そして、その人が他者たちに働きかけるのは、他者たちがその人に抱く想像においてのみである。これらの観念は、それらがお互いに異なった人々の意識的経験のなかに存在しているものに応じて異なっている。しかし、それらの観念はまた同一の内容という核をもっている。その核は公的意識において同一に働くものとなる (Mead,1930:695)。

ミードによると、クーリーの立場が優れている点は、社会過程が意識のなかで進行しているところにある。そして、その社会過程において自我と他者とが生じることを何ものにもとらわれずに見出したところにある。「自我」を他者たちによって抱かれる観念とみなし、他者を他者について自分が抱く観念とみなすことによって、社会過程の二つの局面である個人と社会とが同一の意識のなかにおかれることになる。したがって、他者たちの自我に対する作用と、自我の他者に対する作用は、マインドのなかの互いの観念の相互作用にほかならないものとなる (Mead,1930:699-700)。

けれども、ミードによると、自我はマインドの直接的特質ではない。自我は最初に個人的であって、その後社会的になるものではない。マインドそれ自体は、コミュニケーションを通して生じるものである。意識状態の解釈を通してでしか到達できない自我は、初めから、社会的自我ではありえない。クーリーの見解には、他者の役割を取ろうとする客観的的局面が見落とされている。クーリーは自我や社会が、原初的なコミュニケーションから生じることを見なかったし、それらのリアリティを初期の人間行為のなかで把握していないのである。(Mead,1930:693)。

ミードによれば、クーリーの見解における「自我」は、個人がマインドのうちで、他者が自分についてもつと考える想像上の観念となっている。しかし、「自我」は、他者や自分の観念や想像においてのみ到達できるような心理的なものではなく、心的な局面に対する客観的な経験の局面に属するものである。

ミードにおいては、社会的行為は外的世界から区別された心的なものに先立つような地点にまで遡らせることが必要とされている。「人間という生物体は、クーリーが言及したような心的な経験をもつものに先行して、自分が音声ジェスチャーで話しかける他者の態度を取得し、この態度によって自分にも話しかけ、そうすることによって自我と他者をうみだす」(Mead,1930:704)。自我は意識の前提ではなく、コミュニケ

ーションから生じ、また、自我と同様に直接である他者に依存しているものである。ミードにおけるコミュニケーションとは、「われわれの周囲の物理的世界がそうであるのと同じ程度に直接的な実在性の水準に立脚した、諸々の自我からなるひとつの社会的世界が出現する」(Mead,1930:704) ものである。自我の発生は、集団内での人びとの相互作用をふくみ、集団の先在をふくむ社会過程である (Mead,1934=1970:176)。その社会過程において、ひとは内省的過程により自我を発生させていくことになる (Mead,1934=1970:180)。

クーリーもミードも、自我は社会過程において発生し、形成していくものとしている。その社会過程は、他者との相互作用やコミュニケーションによる過程である。しかし、ミードによると、クーリーが重視する内観的観念は、人間のもつ異なる意識経験のうちに存在する。それは、各個人により異なる観念であるが、公的意識行為として共通性を備えていくものである。「自分自身について意識は、自分が他者に帰属させるところの彼自身の観念の反映である」(Mead,1930:695)。ミードにおいて、内省的観念とは、心的な感覚や知覚が環境の物理的諸対象を解釈するために働くことと同じように、社会的世界を解釈するために働くものである。

ミードにおける「自己意識」とは、個人の身近にはっきりと組織化されている。それは社会集団のなかでの他者たちとのあいだで影響したりされたり、しあっているだけではない。自我としての経験は、他者たちへ向けた行為から受け継がれたものである。他者の態度を採用できるようになり、他者たちが行為するように自分自身に向けて行為するようになるにつれて、それは自我になる。自我の構成とは、身振り会話が経験を指揮し支配するような行為の一部になることによって、自我が発生する。それは、社会的行為のなかで他者たちに影響をあたえ、他者の態度を採用し、その反応に反作用するという社会過程により成立することになる (Mead,1934=1970:183)。

ミードにおいては、苦痛や快樂などの経験に応じるものと対象としての自我の認知や出現に応じるものとが区別されている (Mead,1934=1970:180)。「自己意識」は、



自分自身に対する他者の態度を採用し、感得することで構成される。ひとは、不快なことを経験している最中に何か他のことに注意力を集中できたなら、不快事は影響力を失う。苦痛のもつ我慢のできなさは苦痛への反作用であるから、苦痛に反作用しないように自制できたならば、苦痛そのものの内容を消去できたことになる (Mead,1934=1970:181)。苦痛や感情的な状況を忍耐するよう自制し、自我を経験から部分的にでも分離していく技術により、その経験は経験している人間の経験ではなくなる (Mead,1934=1970:181-182)。

ミードは、マインドが社会過程の所産であると考えてることによって、その起源、発展は説明できるとする。この見地からすると、クーリーの思想は「不可避的で内観的なもの」になる。ミードによると、「社会は個人のマインドのなかに存在しないし、どうみても本質的に社会的である自我という概念も、想像力の産物」となる (Mead,1934=1973,239)。他者が、「もし我々の自我として現われるのであれば、他者にとっての個々人の反応を通じてである」 (Mead,1930:696)。従って、クーリーは主観主義者、観念論者である。

このようにクーリーを批判するミードは、また、クーリーが「自我」を「自己感情」に求めることについても批判し、それではいかなる分析を行なっても自我の社会性には辿りつけないと指摘する。クーリーのように、「自我」をプライドや屈辱といった「自己感情」に見出すのでは、「自我の起源も、そういう経験を特徴づけていると推定されている自己感情の起源も、説明できない」 (Mead,1934=1973:185)ことになる。

ミードによれば、クーリーは「自我と社会とがコミュニケーションの原初的な過程から生じてくることに気づけなかった」 (Mead,1930:705)。それゆえに、自我と社会との「リアリティを人間行為のうちに把握できなかった」 (船津,2000:49) ことになる。ミードにおいてクーリーの内観的で心理学的な思考では、原初的行為から社会を作り出すことと、社会を批判し再構成する社会的パターンを求めることにドアを閉ざすことになってしまう。

このようにクーリーの自我論を批判するミードが強調する自我の社会性とは、「他者の期待の『役割取得』過程」 (船津,1983:45) において具体化されたものである。ミードにおける他者とは「意味のある他者」、そして、「組織化された共同体もしくは社会集団」 (Mead,1934=1973:166) を表す「一般化された他者」 (generalized other) である。

ミードによると、子どもは成長とともに「プレイ段階」と「ゲーム段階」を経験する。「プレイ段階」とは、「ワーズワースが『飽くことなき模倣』の時代として描いたもの、まさにこのような子どもらしさが存在する時期」であり、「フレーベルのいう幼稚園での遊びの時期」である (Mead, 1924-1925=1991a:59)。この時期の子どもは、ままごとなどの「ごっこ遊び」を通じて他者の役割を取得する。子どもは、医師や看護師などといったそれぞれの役割を演じることで、社会に属する人々の役割を取得し、自分の社会での在り方を学んでいく。

そして、子どもが「ゲーム段階」に移行すると、ゲームに参加するすべての他者の役割取得とに基づいて自分自身の行為を選択していく。野球には、ピッチャーやキャッチャーなど各ポジションの社会集団共通の役割期待がある。子どもは、ゲームを通してその集団内の組織化されている反応を取り入れ、それに応じた行為を学習していくことになる。

そして、子どもは多くの他者の異なる期待を組織化した「一般化された他者」の期待を取得することで自我を完成させていく。ミードによると、「すべての人に共通な役割を取得する場合、子どもは自分が集団の権威でもって自分自身と他者に対して話しかけていることに気がつく。その態度は、自明のものとなる」(Mead, 1922=1991b:24)。

ミードによると、子どもは、さまざまな役割の態度をある意味と融合させ自分との対話を通じて、パーソナリティの統一性を獲得していく。集団という画一的な制約がある状況下では、普遍性という統一性をも与えていく。「一般化された他者」は、子どもの段階から取得され、成長とともに自我の変化・変容、再構成していく過程でも重要な要素となり、「一般化された他者」の期待を取得することで自我の十全な発達が可能となる (注3)。

そして、ミードは、「主我」と「客我」概念をもって自己と他者とのコミュニケーションからなる自我概念をより明確なものにした (注4)。ミードによれば、記憶の中で表現される「主我」と「客我」の相違点は、「開始された社会的行為についての記憶イメージと、その行為に対する感覚的反応についての記憶イメージの違い」とする (Mead, 1913=1991a:4)。

また、「客我」は、外的な側面と内省的な側面との2側面を有する。外的な側面とは、他者に働きかけている自我であり周りの対象を直接的に意識する。それは、自我が、記憶によって働きかける自我と働きかける他者を復元する側面でもある。他方、内省

的な側面とは、ミードが「内省的自我」(reflective self)と呼ぶ自我である (Mead,1913=1991a:7)。それは、他者に対する働きかけと同じく自分自身にも働きかける「主我」とのコミュニケーションである。

ミードにおいて、新しい対象に古い自我をそのまま委ねてしまうことは、感情的な反応と古い自我を結びつける領域へと向かわせる。それは、他者の目的を主観的に捉え、利己的な事柄を導いてしまう。新しい対象を客観的に捉えるべきと考えるミードは、状況の再構成によって問題を客観的に捉えるものとする。新しい自我とは、新しい状況が実現し、受け入れられることによって初めて意識となり、新たな自我としてかたちづくられる。(Mead,1913=1991a:12-13)。

ミードによると、自我は、意識のうちに「主我」として現れることはできない。自我は対象としての「客我」として現われる。対象があればそこには主体が存在する。

「主我」なしの「客我」は考えられない (Mead,1913=1991a:1)。「主我」は、意識経験の前提条件であり、対象としての「客我」の主体でなくなることによって、自己としての姿を現わす。ここでの主体としての「主我」とは、表現された主体であり、表現されることによって対象となってしまった主体である。

ミードは、個人より社会が先行して存在する立場から、他者との相互作用を「意味のあるシンボル」(significant symbol) 概念を中心に展開している。ミードによると「ジェスチュア」は人間の発達に伴い「音声ジェスチュア」となる。「音声ジェスチュア」は、個人と個人とのあいだで同じ反応を起こすとき「意味のあるシンボル」となる。「意味のあるシンボル」とは、「すべての他者に向けられるようなジェスチュア、サイン、言葉」である (Mead,1922=1991b:246:25)。

ミードによると、「ジェスチュア」が「意味のあるシンボル」として存在するのは、「自分が自分自身であると同時に他者でもありうる能力を通じてである」 (Mead,1922=1991b:23)。「意味のあるシンボル」は、役割取得における自我形成の前提となるものである。

ミードは、クーリーの考えから多くの影響を受けている。けれども、ミードからすると、クーリーの立場は、不可避免的に、内観的なものであり、唯我論の意味合いを伴っているものである。社会が個人のマインドに存在する立場をとるクーリーの見解では、自我が本質的に社会的であることも想像力の産物にしかすぎないものとなる (Mead,1934=1973:239)。ミードによると、「自我は、『人間が』誕生したとたんにす

であるものではなく、社会的経験や活動の過程で生じるもの、すなわちその過程の全体およびその過程にふくまれている他の個人たちとの関係形成の結果としてある個人のなかで発達するものである」(Mead,1934=1973:146)。

### 第3節 クーリーの社会的自我論に対する再評価の動向

クーリーは、自我は他者とのコミュニケーションによるものとして、デカルトのような孤立的な自我を批判した。しかしまた、感情的側面のみで自我を把握しようとしたことや他者や社会を「想像」を通じたものとして捉えようとしたことが批判されてきた(注5)。

けれども、数年前からクーリーの自我論に対する新たな評価の動きがみられている。H.シューベルトによると、クーリーの考える「想像」は、経験的世界から離れたものではない。マインドは、外部世界との結合によってつくられた「内的経験」である(Schubert,1998:21)。クーリーは、社会的秩序と「デモクラシー」の概念を結びつけ、環境との相互作用を通じて構成されるもの、「相互作用過程において確立される」(Schubert,1998:11)ものに目を向けていた。

クーリーにおける他者とのコミュニケーションには「共感」が含まれている。クーリーにおける「共感」とは、「第一次集団」の他者とのコミュニケーションを通じて、各個人に養われていくものである。「共感」には、自分と他者とを結びつけ、他者に抱く観念や感情をまとめさせる機能がある。それは、クーリーにおいて、他者を知り、それを通じて自己を知るといった「共感的イントロスペクション」とされることである(注6)。したがって、自我はより具体的なものとして形成されていくこととなる。

クーリーは、他者とのコミュニケーションに「共感的イントロスペクション」をみていた。それを表現したひとつが「鏡に映った自我」概念であった。けれども、「鏡に映った自我」は有名な概念なだけに、その概念だけが独り歩きして解釈されてきた。

フランクとゲーカスによると、「鏡に映った自我」概念については、これまで一方的な関心もたれてきた。それは、自我概念の重要な過程が印象的で容易に把握できるものであり、対人的要因と個人的要因とにおいて単純に把握できるものである。さらには、比較的簡単に操作できテストができるものとされ、自我の社会的、対人関係面を重要視したものであり、役割取得の典型的な相互作用過程の本質であるといった、

単純化され、歪められた解釈であった (Franks&Gecas,1992:50)。

このような従来の見解に対して、彼らは、「クーリーの自我理論における自律性と適合性——『鏡に映った自我』概念を超えて——」(1992)で、新たな4つの重要な特性を展開している。

1 つ目は、他者に映し出される自分についての認識や評価とは、他者の意見を受け継ぎ解釈していく過程である。2 つ目は、社会環境によって枠付けされた範囲内における意見が、自分たちにとって問題となる場合のみ受け取っている。すなわち、自分で選択しているということである。3 つ目は、状況から与えられる影響に対して自分に悪影響をもたらさない自我を形成していることである。その自我形成は、性格の連続性から成っている。4 つ目は、「自分のもの」という行為の結果により生成する自我である。そのような自我は、比較的安定的で状況を超えているような価値感覚の重要性を示しており、自律的で社会的である (Franks&Gecas,1992:62-63)。

フランクスらの再評価によると、映し出された他者の評価は行為者による積極的な解釈であり、影響を及ぼされる他者を選択している。とりわけ、じかに他者に映し出されるものによる自律性可能となる相対的に永続的で移り変わる価値感覚がある。自律的で社会的な自我の側面が含まれている (Franks&Gecas,1992:50) ことについてはほとんど言われてこなかった事柄を発見したのである。

フランクスとゲーカスは、ある物事に対して、価値が自分の自我にそぐわない場合に不調和が生じ、自我と価値との関係は反比例の関係となる。それゆえに、苦痛の感情が生じ自我に変化がおこる。クーリーの「鏡に映った自我」における他者について価値と感情との密接な関係が発見されたのである。フランクスらによると、「鏡に映った自我」概念における他者は一時的なものである。クーリーは他者の反応に応じた自我の組み合わせを考えていた。自我が、他者に影響されるということは、継続性と自律性のバランスが前提とされる。他者とのコミュニケーションにおいて価値や感情が不安定になるということは、他者の影響をそのまま受けいれていないことである。すなわち、他者は自分で選択、解釈、判断された他者であることになる。他者とのコミュニケーションによって価値や感情に不調和が生じるということは、自我の自律的なサインである。それが、クーリーにおいて「自己感情」につながることになる。

フランクスとゲーカスによれば、自我感覚は静的な思考のうちに見出されるのではなく、精力的な努力の過程で見出されるものである。そして、この努力が、他者との

対立関係に生じる場合にはより積極的な努力と結びついて出てくるようになる。自我にもっとも結びつくと考えられる人間の誠実性・非誠実性は、自我認識よりも「自己感情」と強く結びついている (Franks&Gecas,1992:61-62)。クーリーにおける屈辱やプライドといった「自己感情」は他者により異なるが、それは自分が他者に抱く重要度により異なるからである (Cooley,1902:184)

従来のクーリーについての理解では、他者による影響と自律性とのバランスは考慮されていなかった。クーリーにおける他者は、自らの選択、解釈、判断による他者である。クーリーは、ミードのような「一般化された他者」といった具体的な他者概念を提示していない。クーリーにおける他者は、全体的で一般的な他者を意味するのではなく、自分が他者に対してもつ重要度や性格によって異なるものとされる。それは、個別的な「意味のある他者」である (Franks & Gecas:1992,小川,2005:497-502)。たとえば、ある事柄について、両親と意見が異なる場合と知人と意見が異なる場合では、そこで生じる「自己感情」は異なってくる。自分がなぜ理解されないかということについて、知人の場合はその人は自分のことをあまり知らないとして、両親の場合ほどにプライドが傷つけられることがない。

個別的な「意味のある他者」とのコミュニケーションは「共感」を通じて行なわれる。「共感」は、クーリーにおいて「第一次集団」とのコミュニケーションにより育まれるものである。「共感」がなければ「親しい結びつき」もない。クーリーが、「自己感情」に自我を求めることは、「共感」があり、「親しい結びつき」がある、個別的な「意味のある他者」との関わりにおいてである。それゆえに、「自己感情」が生じる他者とは、すべての他者ではなく個別的な「意味のある他者」ということになる。

クーリーは、「自己感情」が人生における努力の主源泉であり、「想像」の中心的核心であり続けるものであると信じていた (Cooley,1902:208)。とりわけ、個別的な「意味のある他者」との関係が調和的なものではなく、分化し、競争しあっている、対立的な状況にあるときに生じるものである (Cooley,1909:24=1970:23)。それは他者の態度を取得するからこそ生じる「自己感情」である。

ジェイコブスによると、クーリーの「鏡に映った自我」はその文字通りの概念ではない。クーリーが、「自己感情」に求めたものは内省的プロセス (reflective process) を伴う感情を根拠とした自我である (Jacobs,2006:69)。クーリーが「自己感情」とするところは、彼自身明確に提示しているわけではないが、意識との関連を有すること

によって自己意識的「自己感情」と解釈できるものとなる。

クーリーにおいて、意識には私が自分について考える「自己意識」、私が他者について考える「社会意識」、コミュニケーションをしているグループにおいて組織化されたものとしての「社会意識」についての集合的な見解である「公的意識」(public consciousness)が存在する(Cooley,1909:12=1970:14)。「公的意識」は世論(public opinion)とされるものであり、明確に意識されたマインドの集合状態を意味する。「公的意識」は、他者とのコミュニケーションが親密になればなるほど、生活における結びつきも完全で徹底的なものとなる(Cooley,1909:10=1970:13)。したがって、「公的意識」は各個人が他者について考える意識である「社会意識」といった意味で、「社会意識」に含まれる意識であり、「社会意識」が集まった意識と捉えられる。

クーリーの論拠を辿っていくことで解釈できる自己意識的「自己感情」とは、「ワレ」意識が芽生えたのちに生成するものである。クーリーによると、「ワレ」意識は人称代名詞が習得されるがゆえに芽生える意識である。子どもが「あなたのお名前は」と聞かれて、「私の名前は〇〇である」と答えることができることは、「ワレ」意識である「わたし」(I)と「あなた」(you)などの他者を表わす人称代名詞を正確に習得したからである。

クーリーにおいて、「ワレ」意識は、一面においては「自己意識」であり、他面においては「社会意識」である(Cooley,1909:7=1970:10)。「ワレ」意識は、他者を含んだ「ワレワレ」意識であり、「社会意識」とされる。そして、自分について考える内省的意識は、「他者との関係意識、他者との相互関係についての意識」(Cooley,1909:5=1970:8)から生じる「社会意識」である。クーリーの見解からすれば、このような内省的意識は「自己意識」でもある。結局、「自己意識」は他者とのコミュニケーションにより現われる「社会意識」である。

これらの意識と関連づけられたプライドや屈辱といった「自己感情」は、個別的な「意味のある他者」とのコミュニケーションによって、自己意識的「自己感情」となりゆくものと考えられる。「自己感情」は、他者なしには、その生成はないという「社会性」を有している。また、意識レベルにおいて「自己意識」化されることを通じて、自己意識的「自己感情」として、それ自体の変化、変容がなされることになるのである。

クーリーの自我論は「鏡に映った自我」概念の考察と同一視されることが多かった

こと、さらに、ミードが指摘したような見解が一般的なクーリー解釈として認められてきたことは今まで既に指摘してきたとおりである。しかし、クーリー自身は、自我を「鏡に映った自我」の過程に依存することにおいて、自我が比較的 불안定であることを明らかにしている。さらに、マインドにおける想像については、他者の考えを超え、喜びや悲しみを彼の心の中のイメージに結びつけてしまう誘惑についてできる限り警告している。

クーリーの社会的自我論の決定的特徴は感情にあるが、「鏡に映った自我」概念のみでの解釈では、クーリーの自我論における一側面でしかない。クーリーにおいて、「第一次集団」という社会がなければ「鏡に映った自我」もないのである (Cosser,1978=1981:79)。さらに「第一次集団」とのコミュニケーションにより「自己感情」が生成するという事実は、彼が自分の子どもの観察を通じて発見したことから確証される。

さらに、クーリーの「自己感情」に自我を見出す思想については、ジェームズにおける「客我」である「物質的客我」、「社会的客我」、「精神的客我」すべてを統合したものとして考えられる。

クーリーは、ジェームズが「客我」が引き起こす「自己感情」を自我として位置づけたと考えられる。クーリーは、子どもの観察から「自己所有化」行為という積極的な行為を発見している。「自己所有化」行為は、あるものを所有したいとする「自己感情」が生じることで行われる積極的な行為である。すなわち、身体およびあらゆる物質と「自己感情」が結びついていることから「物質的客我」と置き換えられる。

ジェームズの「社会的客我」とは他者あつての「客我」である。それは、クーリーが社会的自我を強調するにあたり根源とされる場所である。クーリーの「自己感情」は他者とのコミュニケーションによる感情に他ならない。他者と「自己感情」が結びついていることから「社会的客我」と置き換えられる。

ジェームズにおける「精神的客我」とは、経験的自我として、自分の意識状態や心的能力などを意味する。「精神的客我」の中心部を成しているものが「能動的な感じをもった意識状態」である (James,1892=1992:252)。クーリーにおいて、心理学者が経験的自我と表すものは、日常生活で観察され、理解され、確かなものとして証明できる自我である。それをクーリーは社会的自我とする (Cooley,1902:168)。「自己感情」とは、クーリーの観察によって確証された、日常生活で観察でき、理解できる感



情であることから、ジェームズの「精神的客我」に該当するといえる。

クーリーは、自我についてジェームズのように「主我」と「客我」とに線引きをしない手法で新たな独自の自我論を展開した。クーリーは、ジェームズが「温情と親密」(warmth and intimacy)をもって「客我」と呼ぶことで覆い隠した感情について、公平に言語やコミュニケーションに示し、注意深く検討し意味を与えたのである(Jacobs,2006:67)。それが、クーリーにおける「自己感情」であり、厳密に表するならば自己意識的「自己感情」である。

社会的自我とはコミュニケーションから引き出される観念もしくは観念組織である(Cooley,1902:179)とするクーリーの「自己感情」には、3つの特徴が見出される。

①「自己感情」は、他者から反映された自己意識的「自己感情」である。しかし、単なる他者からの反映ではなく、自己の積極性、主体性をもつ。②「自己感情」が生じる他者とは、自己によって選択された個別的な「意味のある他者」である。③「自己感情」が生じる他者とのコミュニケーションは、あらゆるコミュニケーションに該当しない。自己と他者間において、「共感」を有しており、「親しい結びつき」をもつコミュニケーションである。ゆえに、他者を知り、それを通じて自己を知る「共感的イントロスペクション」が可能となる。

クーリーにおける「自己感情」は、マインドを通じて知る感情であり、「共感的イントロスペクション」することで理性と個性を有した感情となる。ひとは、「自己感情」により新たな自己と出会い、自己と向き合い、新たな自己を形成していくこととなる。

「自己感情」から見出される自我といった考えは、孤立的な自我ではなく、他者といった社会性を有したものである。

(注1) ジェームズは、C.パースや J.デューイと並んで、プラグマティズムの主唱者であり、アメリカ心理学の先駆者でもあった。彼は早い時期から自我の経験的把握を試み、自我を固定して実在するものとしては捉えず、流動的で変化変容する過程的なものとして捉えた。

(注2) クーリーは「想像」概念を「鏡に映った自我」以外の脈絡においても用いている。彼はマインド、「個人」、「社会」を捉えるうえでも適応している。クーリーにおいてマインドとは「絶え間ない会話の中に存在する」(Cooley,1902:90)ものである。マインドはさまざまな個体から成り立っている有機的なものであり、「個人」と「社会」が

相互に関連し合い生じるものである。同様に、「個人」と「社会」も「想像」を通じて捉えられるものであり、「個人」と「社会」はマインドに存在するものである。クーリーにおける「想像」概念は、あるものを捉える際に、あるものとあるものを繋げるようなものであった。

(注3) ミードによると、「一般化された他者」概念を通じて描かれる社会イメージは、国際心まで拡大される。他者は、人種、階級、国家を超えて最大限に拡大され普遍的なものとなっていく。自己と他者との相互関係で共通の意味を有し役割を取得することで、他者がより広い社会の「一般化された他者」として存在し、期待とのかかわりで拡大された社会で普遍性を獲得することになる。これは、より大きな社会での自我の社会性を意味する(船津,1989:129-134,1999:105-108)。

(注4) ミードは「主我」概念についてそれほど明確にしていけないのである。この点については、後の研究者により「本能・衝動説」、「残余説」、「創発的内省性説」といった議論がある(船津,1989:10-11,2000:70)。「本能・衝動説」とは、社会的束縛の機能を果たすのは「客我」であるということから「主我」を本能や衝動であると考えること。「残余説」とは、「主我」は「客我」以外のもの、つまり人間の個性、個人差、特殊性、プライバシー、主観、逸脱、異常、主体性を表わすもの。「創発的内省説」とは、他の人間の目を通じて客観的に自分の内側を振り返ることによって、そこになにか新たなものが創発されてくることを表わすことである(船津,1983:85-100,1989:11)。

(注5) このような指摘は、これまでのクーリー理論に対する解釈とされてきたところである。コーザーも、クーリーの理論を「唯心論的で、内観的な見方に批判を加えなければならない」(Coser,1978=1981:79)としている。

(注6) クーリーは、「社会知識のルーツ」(1926)において「共感的イントロスペクション」が社会科学方法の基本であるということを述べている(Jacobs,2006:17)

## 第4章 感情の社会性

### 第1節 感情へのアプローチ

「群盲像を撫でる」に登場する4人が示しているように、大きな存在の一部だけをみても全体像は捉えられない。彼らのうちの1人は、象の脇腹に触れ「象は壁のように広く、平らだ」といい、2人目は象の足に触れ「象は大きく、木の幹のように丸い」といい、3人目は象の鼻に触れ「象は長くて細い」という。そして、4人目は象の尻尾に触れ、「象は小さく、丸く、先に向かって細くなる」といった。

感情についての研究は、着目する側面により内容が異なってくる。感情とは何かという問いの答えは、問いかける相手によって、また、時代によってさまざまである。そして、感情は人々にとって意のままにコントロールできず、それは自然に感じるものとみなされた。つまり、感情の経験は生理的なものや心理的なものによって決まっていると考えられた。したがって、感情は生理学的過程、生物学的反応での解明においてのみ可能なものとされてきた。

感情に対する関心は、東洋では、老子(紀元前6世紀)の時代、西洋ではソクラテス(紀元前470-399)の時代以前から種々もたれてきている(Cornelius,1996=2003:2)。西洋では、感情は理性と対立するものであり、原始的で本能的なものであるとされた。感情は、「遺伝的に決まっているものであり、生物学的基盤をもつものであり、その後で個人の経験によって変容していくもの」(Gergen,1994=2004:291)とみなされた。そして、近代社会においては合理性が優先され、感情は非合理的なものとみなされた。

けれども、感情が単なる生理学的、生物学的出来事であるならば、たとえば結婚式の場では喜びや嬉しさの感情が受け入れられ、怒り、悲しみ、嫉妬、羨望などの感情が疎まれるようなことは生じないであろう。

なぜ、ひとは書物、映画、芝居、絵画などに感動するのだろうか。美味しいものを味わって幸せを感じるのだろうか。家族や恋人を愛しく思うのだろうか。友達との会話で表される感情は、日常的な状況や場面において自分を表すものとして、自分を教えてくれる手がかりとなる。すなわち、感情は人間特有の事象であるといえる。そして、感情は自我の生成や形成と深くかかわっている。

精神分析学者のS.フロイトは、自我、超自我、エスとに分けている

(Freud,1915=1970:269)。自我は外部からの刺激により意識されるが、意識化されない場合には、前意識もしくは無意識に分けられる。それはエスの代理人としての自我に対立する (Freud,1923=1970:282)。

フロイトは自我を本来無意識的なものであるという。自我は、意識と結合することによって意識化された自我となるが、他方では、前意識、無意識が存している。意識は本来、意識と無意識の2種類とされるが、それは力動的な意味合いでの意識と無意識である。しかし、フロイトによれば、記述的な意味合いをもつ場合には、無意識は前意識と無意識とに分けられる。それは潜在的に意識されるものと、抑圧されているがゆえにそれ自身では意識されることのない意識である。この意識、前意識、無意識により知覚されたものによって、「快」と「不快」が想起される。「快」と「不快」が「愛」という感情と「憎しみ」という感情、「愛する」という感情と「愛される」という感情に辿りつく。「愛する」という感情は「憎む」という感情と対立関係にある。「愛する」という感情は「愛される」という感情と対立関係にある。「愛する」と「憎む」という感情は無頓着と無関心との対立関係にある。「愛」と「憎しみ」との関係は単純ではなく、「愛」と「憎しみ」の起源はそもそも異なるものであり、独自の発展を辿るものである。

フロイトによれば、「愛」と「憎しみ」の対立関係は、自我と外界の相互作用によって引き起こされる「快」と「不快」から生じる。外界が自我に刺激を与える機能を果たすことで、自我は受身的もしくは能動的となる。自我において、その刺激が「快」であるならば摂取され、「不快」であるならば外界に迫いやられる。「快」と「不快」との選別は、自我と外界の相互作用により引き起こされる内部の知覚と自我との関係による。それは、意識、前意識、無意識のいずれかの意識化により、内部の知覚となる。外部から受け取られた知覚は、内部では感覚や感情として受け取られる。これが、「快」か「不快」という選別に繋がる。外界は自我に刺激を与え、主体となる自我は対象化されるものであり、外界の刺激に対して受身的となる (Freud,1915=1970:73)。

フロイトは、感情の典型として不安を選び出した。それは、不安という不快な状態が、不快な状態に対抗する自我の防衛壁をたくさん作らせるということで重要であったからである。不安は危険が予測されると自我のなかで呼び起こされる1つの感情である (Hochschild,1983=2000:37)。

A.R.ホックシールドによると、フロイトにおいては、感情は本能的欲求に付随する

ものだと考えられていた。感情は差し迫った危険の兆候や行為につながる原動力とみなされた。それゆえに、不安といった感情は、エスと意識的な表現との媒介者として自我の役割となる。自我には、エスの本能的欲求を下位に置き、それらを中和したりまとめたりする能力が割り当てられる(Hochschild,1983=2000:236)

フロイトにおいて、感情の多くは意識されないものとされる。感情は知覚されるが、誤って解釈されることが起こる。それは、適切な表現を抑圧することで、別の観念と結びつかざるを得なくなり、その別の観念として意識的に解釈される。感情は決して無意識のものではない。しかし、その観念的表現は抑圧されるのだが、それにもかかわらず、その本来の結びつきをもとに戻したときには、もともとの感情は「無意識」と呼ばれるようになる(Freud,1915)。

ホックシールドによると、フロイトの初期の論文では、本能的生得性や、個人と生得性を深く結びつけている不安、そして、個人の理解と本能との間を仲介するものとしての無意識に焦点が当てられており、自我と超自我によって仲介される社会的影響はあまり重要なものではない(Hochschild,1983=2000:238)。けれども、フロイトによって不安がもつ「シグナル機能」について書き残されていることは見逃せないといえる(Hochschild,1983=2000:250)。フロイトによると、不安は個人の内側または外側に危険が存在することを知らせる。それは案じられる危険を告げる手段である。また、喜び、悲しみ、嫉妬などの感情も、内部または外部の環境をどのように了解するかに関する信号の送信者とみなされる。

このような感情は、人間において、言葉、目の動き、顔の表情、ジェスチャーなどによって表現される。「嬉しさ」や「喜び」は笑顔として、「悲しみ」は泣き顔として外的に表される。行為に表される感情であるならば、「愛」は他者に向かって手を差し伸ばそうとする衝動として経験され、「怒り」は他者をなぐるという行為により経験され、「悲しみ」は泣き叫ぶという行為により経験される。

乳児は、泣きながらこの世の光を受け、「泣くことが仕事」とよく言われるように、泣いているイメージが強いが、悲しいから泣いているとだけ理解されるわけではない。親や養育者たちが、泣いている乳児を目の前に「おなかが空いたのだろうか」、「眠たいのだろうか」、「おしっこをしたのだろうか」といったように意味づけを行なう。乳児は、このような周囲の大人たちの意味づけにより欲求を満たしていく。自我と他者が分離されていない段階の子どもにおいても感情は生じている。しかし、それらの感

情は親や養育者たちの意味づけが先行している。感情は、個人の構成要素ではなく、関係性の構成要素となる「自他に対するシグナル」である(久保,2006:33)。

「喜び」、「悲しみ」、「怒り」、「誇り」、「恥」、「恐れ」などといった感情には自他へのシグナルとしての意味がある。「喜び」は、自己に対しては「現在の活動を継続せよ」というシグナルであり、他者に対しては「良好な内的情感の伝染による社会的絆を促進する」シグナルとなる。「悲しみ」は、自己に対してはそれ以上の外傷体験がふりかかってくることを阻止するための活動の抑止のシグナルとなり、他者に対しては「養護・共感・援助を引き出す」シグナルとなる。また、「怒り」は、自己に対しては「目標達成の妨げとなっている障壁の除去」のシグナルとなり、他者に対しては「攻撃するかもしれないということを警告する」シグナルとなる(久保,2006:33)。このようにシグナル化される感情は、自己と他者との関係を調整する有用なものとして捉えられている。

感情は「文化における感情」(Gergen,1999=2004:203)といわれるように、所属する社会によって異なっている。感情は、状況に応じ、それに適合した「標準化された感情を経験するように調教される」(岡原,1997:93)ようになる。社会が変われば、その社会に属するひとの経験する感情も変わり、感情についてもつ人びとの知識や判断も変わるものとなる。このような感情は単に表されれば良いというものではない。感情表現が他者に理解されるということは、その感情表現が社会化されているからである。感情表現は共有のシグナルを通じて社会化され、他者から認識され、評価されるものとなる。

前述したように、クーリーが生きた時代においては、感情は生理学的、生物学的な解明および単なる身体的反応であるとされていた。彼は、まだ感情の社会性という考えが否定されてきた時代から、感情の社会性に気づいていた。しかし、今や、感情は他者とのコミュニケーションにおいて、シグナル機能をもつものとされてきている。感情は、言葉やジェスチュアにより表現されるということは、言葉やジェスチュアの背後には、感情が存在しているということである。それは、クーリーが、言葉やジェスチュアといった認知されるものには、想像を通しての混合されたものがあり、マインドに帰結する「心的なもの」があるとしているところである。

クーリーは、感情についてシグナル機能といった展開はしていない。しかし、クーリーにおける「自己感情」は、他者とのコミュニケーションにより映し出された「自

己感情」である。それゆえに、「自己感情」は意識化することで自分に対してシグナルを発する感情と解釈できる。

## 第2節 社会的感情

D.エヴァンスによると、「情動には情動なりの固有の理性」(Evans,2001=2005,170)があり、「聡明なる行為は、情動と理性との調和的な融合の結果生じる」(Evans,2001=2005:vi)のものである。情動は知性的な行為を起こす上で不可欠なものである。

感情に左右されずに勘定で働く経済人、市場は重視するが私情や詩情には無縁の経済人、というように、これまでの経済学では感情とは一見無縁のようであった。けれども、こんにち、経済学においても感情についての考察が求められている。ひとが物事を決定したり、判断したりするとき、さまざまな要因の選択肢を総合的に評価して決定しているように思われる。けれども、それらは経済学上「フレーミング効果」といわれるものである(注1)。ある物事について決定づけるということは、意思決定者がその現象に対して、自分自身で能動的・自発的にフレームに押し込み、それにより選好や選択が支配されるようになるということである。それは、意識的というよりも、無意識的になされること多い(友野,2006:194)。友野によれば、たとえば「ブルガリの腕時計に決定した」ということは、「ブルガリが好き」と言っていることと同じことである(友野,2006)。さまざまな選択肢からすべての利点を見越し、欠点を考慮し、慎重に判断を下しているかのように思われる。しかし、そのガイドラインとなっているものが、「良い」か「悪い」、「快」か「不快」の判断である。

ひとは、どのような選択や決定であっても「その選択肢を選んだ納得のいく理由やストーリーが必要であり、十分な理由があって選択が合理化できればたとえ矛盾があったとしても構わない」(友野,2006,209)。ある目的を達成しようとすることにおいては、関連する事柄を数量化し、規則化し、関係者の行為をコントロールすることによって、効率的かつ予測可能な形で目的達成をしようとする。感情は、いかなる判断においても何らかの要因としてそこに含意されている。

現在、思考能力を数値化する IQ(Intelligence Quotient)テストで思考能力の高さが図られたように、EQ(Emotional Intelligence Quotient)テストによって協調性や思い

やりといった感情能力が数値化され、心の知能指数が求められている。EQ とは、感情状態を知覚し、思考の助けとなるように感情に近づき、生み出し、感情および感情知識を理解し、感情面や知的側面の成長を促すように感情を内省的に規制する能力をいう。「心の知能指数」をコントロールすることが EQ である。

EQ を「心の知能指数」ではなく「感情の知性」とする森は、①感情をうまくマネージできなかつたことを問題視し、②人格崇拝規範、道徳の違反、ものごとの合理的な進行を問題視し、③過去のある時点での経験や状況にこだわりすぎていることを問題視している(森,2000:139-140)。すなわち、過去の経験である「あのとき、あそこ」では成功していたことが、「いま、ここ」では失敗に終わり適応できないようになる。「感情の知性」の習得が重要である理由は、「あのとき、あそこ」への過剰な関与を目標として、「いま、ここ」の状況に適切に関与していくことである(森,2000:144)。

森は、「感情の知性」を求める現代人の様相について、G.リッツアの「マクドナルド化」社会(注2)との兼ね合いで展開している。マクドナルドを始めとするファーストフードには、①効率性、②計算、計数、測定可能なものの強調、③予測可能性、④制御——人間技能に人間によらない技術体系への置き換えという制御——の4つの基本原理が存在する。

①効率性とは次のようなことを表す。お客はまず列に並びカウンターで注文し、商品を受け取り、代金を払い、席に着き、大量のカロリーと炭水化物で胃袋を満たし、ゴミを片付け、店を後にする。お客への通常の対応や苦情処理に関して細かく規定されたマニュアルなどにより、店は効率よく回転していく。

②計算、計数、測定可能なものの強調でとりわけ重要なことは、質を量に置き換えることである。たとえば、「ハンバーガー」と「ビッグ・マック」では値段の差以上に量の差が強調されているため、値段のわりに得したような気にさせる効果がある。従業員の労働、商品提供の早さ、商品の大きさ、重さなどは、すべて正確に測定され、測定値が質を表現している。

③予測可能性とは、「マクドナルド」の「ハンバーガー」、「フライドポテト」などが、いつ、どこの店舗のものを食べてもほぼ同じ味ことである。いつでも、どこでも、お客が予測できる味を提供することで、「予想された味が予想通りに出される安心感」(Ritzer,1996=1999:33,森 2000:152)をお客にもたらすようになる。また、店舗の構造、従業員の対応も予測可能であり、マニュアル化された規制や従業員の行為は、お



客側にも予測可能な行為を選択させている。

④技術体系の制御は、機械や道具のみならず、スキル、知識、ルール、規制、手続き、マニュアルなどである。お客、従業員、製品は、機械化されたキッチンやマニュアルにより経営者の期待どおりにコントロールされる。

これらの4次元の基本原理は、独立して存在するのではなく、相互に関連している。これらの知識と技術は、「楽しさ(fun)」という新たな要素を踏まえつつも、教育、医療、各種のビジネスだけでなく、日常生活へ浸透し、支配力を及ぼしつつある。各国に広がるファーストフード産業の繁栄は、効率性、計算可能性、予測可能性、制御が「マクドナルド化」した社会を構成し、暗黙のうちに個人を「マクドナルド化」へと導いている。

森は、4次元の基本原理に沿って「マクドナルド化」する個人の様相を描いている(森,2000)。①効率性については、ひとがセラピストを受診することは効率的であると判断しているからである。感情が不安定であり、その不安定さに気づいていないと集中力が失われ、仕事や勉強に必要な知識、技術の学習が妨げられる。そこで、「感情の知性」を習得することで、感情のコントロール能力や効率性を高めることで仕事や勉強の集中力が向上する。

②計算可能性については、自分の心理状態や性格に不満をもち、変えたいと願っている人は、そもそも自分の心理状態、性格を把握していない。心理テストや添付リストが添付されている質問項目に答えることで、自分の心理状態や性格が、得点化、数量化される。「感情の知性」が、得点化、数量化された結果により、把握でき、自分の能力を高めようと訓練していくようになる。ひとは、測定可能な得点化、数量化により自分をコントロールする。

③予測可能性とは、「感情の知性」を身につけた人の特性である(森,2000,159)。IQや学校のテストが高くても、それが人生の成功に結びつくかといえばあまりあてにはならない。EQが強調するところは、IQよりも将来の行動傾向や社会的な成功を予測できることである。したがって、「感情の知性」を身につけることが、将来の未来予想図を予測できることとなる。

④制御とは、自律的に自分をコントロールしながらも、マクドナルドの店員がマニュアルにより感情を管理していることと同じく、自発的に、強制されることなく、「感情の知性」を身につけるように自分コントロールしていることである。

「感情の知性」を身につける行為者は、ファーストフード産業の4次元の基本原理を身につけている。すなわち、社会全体が大きなマクドナルドの店舗のようなものであり、私たちはマクドナルドの店舗のなかで日常生活を送っている。それゆえに、「マクドナルド化」した社会は維持し続けられる(森,2000:155-160)。個人は「マクドナルド化」した社会に適応しようとして、自分自身も「マクドナルド化」の道を歩んでいることになる。

現代人がもつ感情とは、「マクドナルド化」した感情となっている。この社会に生きるひとは、会社、家庭、地域集団などといった日常生活で自分がよりよく過ごす為や自分をコントロールする為に、「感情の知性」を身につけ、それが「マクドナルド化」した社会に適応していき、自分自身も「マクドナルド化」の一途を辿っていくことになる。

### 第3節 「感情マネジメント」と「感情労働」

「マクドナルド化」した社会は、現代人の感情をも「マクドナルド化」させてしまった。このような社会から構成される感情についての視座は、1970年代半ばを期に始まった。社会学において感情研究が主役として公の場にその姿を現わしたのは、1975年に開催された「アメリカ社会学会大会」で感情についてのセッションによってであった。ホックシールドが先駆的な論文を発表したこと、T.D.ケンパーが『感情の社会的相互作用理論』(1978)を発表したことによって、感情研究は大きく進展していくこととなったのである。

感情は単なる動物的なものの発露ではなく「社会的なもの」である。愛する人がそばにいと喜びの感情が生じ、愛する人を失うと悲しみの感情が生じる。男性には「怒り」の感情が多く、「悲しみ」の感情が少ない。女性は「嫉妬」の感情は多いが、「怒り」の感情は少ない。すべての感情は、他者を見るように自分の状態を教えてくれる。感情は実体をなさないものであるがゆえに、主観的な経験がすべてとされるかもしれないが、社会的、相互作用論的性格をもち、あらゆる感情はシグナル機能をもっている(Hochschild,1983=2000:32)。

ひととひととの相互作用に着目し、感情を社会的現象として分析するホックシールドは、感情を行為や認知とを方向づけ、感情に対して何が「なされるか」、それを受け

て感情がどのように変容するかということの問題とする。

ホックシールドによると、感情のあれこれの側面に関する議論を辿っていくと、有機論的観点と相互作用論的観点がある(Hochschild,1983=2000:228)。彼女の理論的立場とは、相互作用論の伝統にそって、デューイ、H.ガースと C.W.ミルズ、E.ゴフマン、有機論の伝統にそってダーウィン、ジェームズ、そこから、さらにフロイトの「シグナル機能」概念を用いて相互作用論へと再び戻る流れから、感情についての新たな地を開拓したものとされている(注3)。

そして、ホックシールドは現代人の感情には、「感情ルール」(feeling rules)を背景とする「感情マネージメント」(emotional management)がなされていることを指摘する(注4)。「感情ルール」に違反してしまうと、他者を傷つけ、その場の空気を濁してしまい、秩序のない人間とみなされてしまう。たとえば、故人の冥福を祈り悲しみに包まれているお葬式の中で、喜び笑顔を零している人をみると、その場にいる多くの人が不快を感じるだろう。祝福を祝う結婚式の中で怒っている人をみても、多くの人が不快を感じるだろう。人びとは「感じなければならない感情」をもちながら、日常生活を過ごしており、「感じなければならない感情」は労働に深く浸透している。

ホックシールドは客室乗務員を対象とした実証研究から、公的領域では「感情労働」(emotional labor)(注5)が求められており、そこに「感じなければならない感情」である「感情マネージメント」があることを指摘している。

ホックシールドによると、「感情労働」は、対面あるいは声による顧客との接触が不可欠であり、他者に何らかの感情変化——感謝の念や恐怖心——を起こさせなければならず、雇用者は、研修や管理体制を通じて労働者の感情活動をある程度支配することが共通している(Hochschild,1983=2000:170)。西川によると、第3要素である雇用者からの「感情労働」のコントロールが、ホックシールドの最も強調するところであり、それが「感情労働」の脱スキル化および感情労働の価値の低下をもたらしている(西川,2006:4)。

たとえば、販売員、セールスマンなどといった接客業には、常に「感情労働」が求められる。お客との対話のなかでは、常に会話でのキャッチボールが繰り返され、会話を通じてお客の好みを知り、いかに彼らの要望に近づけるかが求められる。どのようなサービス業もお客に対しては、常に臨機応変に対応し、常に気を使い、心が穏やかでなくても決して表情や行為には出すことは許されない。サービス業に携わる

人々は、物を生産するために肉体労働をする人たちと同じく、サービスを提供するために「感情労働」を行なっている。それは、ファーストフード産業が基本原理に基づいて、経営者が思惑通りに労働者の感情をコントロールしていることと同一である。

このような状況下において、「公的な自己」から「私的な自己」、言い換えるならば「緊張した私」から「くつろいだ私」の双方が切り離せなくなったときに、どれが「本当の自分」であるのか、どれが「演じられた自分」であるのかわからなくなる。

感情のコントロールは、他者に対しては偽るが、自分に対しては偽らず、意図的に作り笑いやため息などを行なうことで自分の外見を装い感情を演技する「表層演技」(surface acting)と自分が「感じるべきだ」、「感じたい」といったように「あたかも～であるかのように」という仮定法的に感情を演技する「深層演技」(deed acting)との狭間で支障が生じている。「深層演技」は、自分で演技であることを自覚することなく行われることから、他者に対しても自分に対しても偽っていない演技である。ホックシールドによると、ひとは「表層演技」と「深層演技」を行なうことで、他者との関係に支障を来さない日常生活を過ごしていることになる。

ホックシールドによれば、人々の労働が「感情労働」のときには3つの難しい問題にぶつかる。「自分の仕事や社会と一体化することなしに、どうやって心から、仕事や会社に帰属意識をもつことができるのか?」、「働きかけている<相手と>気持ちの上で切り離されるときに、いかにして自分の力を使うことができるのか?」、「もし私が一体感をもてない相手に向かって深層演技をするとしたら、どうすれば皮肉っぽくならず目尊心を<維持>できるのかしら?」(Hochschild,1983=2000:152-155)といった問題である。

労働者が①の問題にうまく取り組むには、「自己への同一化が求められる状況」と「目らの役割や会社への同一化が求められる状況」とを区別しなければならない(Hochschild,1983=2000:152)。会社は、個人的な満足感と会社の繁栄や存在主義とを一体化させようとする。それは、ある一定の期間に限定するならばうまくいくことが多い。しかし、会社があまりに「自然な親切」の販売を重視するならば、「公的な自己」から「私的な自己」への切り離しが困難となり、仕事を演技のようなものと考えにくくなる。すなわち、広範囲にわたっての「深層演技」のテクニックを有していないがために、物事が悪い方向へと進んで行き、傷つき、悩み、腹を立てたりする。そのような出来事が頻繁に起こると「公的な自己」と「私的な自己」との一体性を保つこと

が困難となり、自分の笑顔や「感情労働」が、本当に自分のものなのかどうか、自分のどの部分が会社のために装っている部分なのかどうかといった疑問を有するようになる。

大多数のひとが、この問題に対する解決策に対して、時と場合において「本当の自分」であると結論に到達する。このような解決策に到達できる労働者は、「深層演技」がうまく、「公的な自己」と「私的な自己」とを切り離す考え方を受け入れ、双方の自己を歓迎している(Hochschild,1983=2000:153-154)。

②の問題に対しての取り組み方は③の問題と関係してくる。ホックシールドの結論からすると、仕事を深刻に考えることをやめるということである。「深層演技」のテクニックを有しているからといって、それが常に利用できるわけではない。時には「表層演技」へと後退してしまうがゆえに、「自分が詐欺師なのか否か」という問題に直面するのである。本来ならば、心がこもった業務を行ないたいと思っているのに表情のみしか貸し出すことできない。そのような行為は、自分が「詐欺師である」と考えてしまう可能性が危惧されている。自分が「詐欺師である」ということは、演技力が乏しいだけでなく、道徳的欠如の証拠であるがゆえに深刻な問題となる。

このような問題から③の問題が浮上してくる。この問題は、仕事を再定義することにより解決できる場合もあれば、「表層演技」が必要不可欠だと結論づけることで解決されていく。最終結果としては、仕事を深刻に考えることを辞め、「詐術」は誠実な微笑でも人間でもなく、「すばらしい時間」であるといった考えに辿りついていくことになる。しかし、実際、乗客も乗務員も「すばらしい時間」などは過ごしていないのである(Hochschild,1983=2000:154-155)。

すなわち「感情労働」を有さなければならない労働者は、自分がコントロールできない膨大な人びとに対して「深層演技」が要求される。「感情労働」は「自己に関する意識への挑戦となる」(Hochschild,1983=2000:156)。感情がうまく商品化される時は、ある程度の満足感が得られているときである。自分が詐欺師であるといった場合には、すでに表情と感情は道具として使用されているにすぎないのである。

他方、私的領域における感情は、公的領域と同じく「実際に動いている真実への手がかりを与えるのに役立つ」(Hochschild,1983=2000:36)感情もあるが2つの複雑な事態が生じている。ホックシールドによると、ひとつは、感情という手がかりとそれに対する解釈との間に存在するものである。ひとは、自分が感じていることを隠した

り、感じていないが感じているように装ったりといったように、表面的な行為をとることができる。表面的な行為を行なったときは、感情という手がかり自体は変更されない。次いで、根本的な関連とされる刺激と反応との間、誰かをがっかりさせることと罪を感じることとの間などに現れるものである。すなわち、感情という手がかりは、「深層演技」により解消されるが、他方から見ると、他者を欺いていることと同時に自分自身にも欺くことになる(Hochschild,1983=2000:36)。

それは、私的領域でも公的領域で強いられる「感じなければならない感情」によって、「自然」な感情経験が抑圧されていることである(崎山,2005:76)。公的領域での「感情労働」は企業組織に委ねられているために感情の他律化が進んでいく。そのため、私的領域での感情もまた影響を受け「表層演技」と「深層演技」とをうまくコントロールすることにより自己を保持していく。けれども、「表層演技」や「深層演技」を行なうことは、「本当の自分」をより自分の内部に押しやり、一層手の届かないものに行っていることも事実である(Hochschild,1983=2000:37)。ひとは公的領域においても私的領域においても、何らかの衣服を身に纏わせた感情を構成してしまっている。

人びとは感情にアクセスすることで、自分を見て、思い出し、想像することで、自分自身との関連性を学んでいく。けれども、どれほどの人が、感情と向き合う手法、知識、知恵を身につけているだろうか。公的領域で求められる「感情労働」の度合いが強ければ強いほど、私的領域での感情意識が失われていく傾向がある。このような状況は、「感情経験への反省性の上昇」と「感情管理のスキルの増大」(崎山,2005:102)が見られる社会であり、自己が他者との関係で感情をどのように応用していくかが問われる時代である。現代は、「感情意識化」(emotion consciousness)が求められる「心の時代」である(崎山,2005:102)。

ひとが、どのように感情をマネジメントしているかという出発点から「マネジメントされる感情」へと辿り着いたホックシールドは、感情とは物事を理解するための方法を教えてくれるものであるという。感情は、自分の位置を知らせてくれるようなスポットライトのような役割を果たしている。ホックシールドは、「マネジメントされる感情」を打ち出すことによって、本当の「自己感情」が見失われるという現代人の感情の危険な様相を指摘している。

それでは、本当の「自己感情」とはどのような感情であろうか。それは、「表層演技」も「深層演技」も強いられない感情である。ホックシールドが明らかにしたように、

現代人は公的領域における「感情労働」と私的領域における「感情作業」により、感情をコントロールしている。感情のコントロールとは、感情を意識化することで可能となるものである。「内省がなされない感情」があるならば、他方に、「内省がなされる感情」があるといったように、感情は「自分自身との相互作用」(self-interaction)により自己意識化されることでコントロール可能となる。

「感情労働」が求められる現代人に必要なことは、自分を保持するために感情をコントロールするのみではなく、自分自身の感情と率直に向き合うことである。そのシグナルなる役割を担う感情が「自己感情」といえる。クーリーが、自我として位置づけたプライドや屈辱などといった「自己感情」とは他者の期待と自分との間に生じたずれの感情と位置づけることができる。この感情のずれは、ホックシールドの論点からもわかるように、公的領域、私的領域ともに生じる感情のずれである。けれども、私的領域においては、感情をコントロールする以前にずれとして現れる感情、すなわち「自己感情」と向き合うべきである。

クーリーが、自我とする「自己感情」にはその主体性が見出される。しかしながら彼が、子どもの観察から発見した段階での「自己感情」には、彼らの積極性、自律性を見て取れてもそれは主体性と呼びうるものではないであろう。すなわち、この段階の子どもには「ワレ」意識がしっかり芽生えていないために、「自己感情」を意識化することは不可能である。けれども、「ワレ」意識の成長に伴い「自己感情」は意識化可能とされていく。

社会からコントロールされる感情があるならば、社会からコントロールされない感情もある。それは、社会からコンストラクションされるがゆえに抑圧されている感情かもしれないが、その感情こそがその個人において主体性をもつ感情である。その主体性をもつ感情が意識化された「自己感情」である。現代人は、「自己感情」を意識化する方法を身につけていくことで、自分自身を知り、新たな自我を形成することが可能となる。

(注1) たとえば、コップに水が半分は入っているのを見て、「まだ半分入っている」と思う人は楽観主義者で「もう半分しか入っていない」といふ人は悲観主義者といった言葉があるように、同じ内容を見ても、状況や理由により異なった受け取り方となる。問題が表現される方法を判断や選択にとつての「フレーム」と呼ぶ。フレームが異なる

ことにより、異なる判断や異なる選択が導かれることを「フレーミング効果」という  
(友野 2006:176)

(注 2) 「マクドナルド化」とは、「ファーストフード・レストランの諸原理がアメリカ社会のみならず世界の国々の、ますます多くの部門で優勢を占めるようになる過程」を意味している (Ritzer, 1996=1999:17-18)。

(注 3) 彼女の研究動向には、有機論的と呼ばれる観点と相互作用論的と呼ばれる観点といった異なる2つのモデルが含意されている。有機論モデルでは、ダーウィン、フロイト、ジェームズの3者に言及し、それぞれの感情論を位置づける。ホックシールドによると、ダーウィンの感情理論とは感情的表現を目に見える身振りに焦点をあてる身振り理論であり、フロイトは感情の意味を重要としているリビドーの放出であり、ジェームズにおいては本能的な身体内的変化に対する脳の意識的な反応であるとする。けれども、彼らの感情論には社会的要因が見落とされているとして、デューイ、ガースとミルズ、ゴフマンといった相互作用論的観点の立場から社会的要因を踏まえ彼女独自の色をそなえた新たな感情の社会理論を展開する。彼女独自の「感情モデル」は、制度と人格の関連性を描くガースとミルズの社会的側面と心理的側面を両方把握しなければならないという視座に依拠する。さらに、ゴフマンの研究においては、意識、無意識に関わらず自分の外見をどのようにコントロールしているのかという彼の洞察に多くを負っている(Hochschild,1983=2000:232-252)。

(注 4) 翻訳では、ホックシールドの使用する「emotional management」あるいは、「feeling management」には、「感情管理」という訳語が当てられている。本論では、EQ との兼ね合いをも考慮すると「management」を「管理」と訳すだけでは、そこでの意味が限定されると考え「emotional management」、「feeling management」は、「感情マネージメント」と訳すことにする。

(注 5) ホックシールドは、「感情労働」(emotional labor) を公的に観察可能な表情と身体的表現を作るために行なう感情の管理という意味で使用している。また、私的領域における同種の行為を意味するものには、「感情作業」(emotional work) を使用している。本論では、同種の行為ではあるが、ホックシールドが公的領域と私的領域において、その表記を区別していることから、公的領域の場合には「感情労働」、私的領域の場合には「感情作業」と表記している。



## 第5章 「自己感情」論の現代的展開

### 第1節 「自分というもの」と「自分ということ」

クーリーの観察からすると「自己感情」は、他者との生活で育まれるものであり、自我の主体性や積極性が表われた感情であることは事実である。そして、その感情を自我と記したのがクーリーであった。K.J.ガーゲンによれば、19世紀の多くの著作において、自我は「全体を構成する要素」とみなされ、自我は全体としての社会に参加することによってのみ実現可能なものとされていた（Gergen, 1999=2004:288）。しかし、このような見解では個人は社会から構成されてしまうことになってしまい、そこでは、積極性や主体性を有さない自我の形成となってしまう。

19世紀後半から20世紀前半にかけて社会学者であったクーリーは個人と社会を表裏一体のものとする立場に立って自我を問題とする。クーリーは、社会は個々人が有する自我と自我とが統合したものとみなす。そこには、「自己感情」による自我の積極性および主体性が見出されている。けれども、クーリーが生きた時代における感情とは、自然発生的なものとしていたがゆえに、「自己感情」から自我を見出す見解では自我の社会性の見地はみえてこないものと批判されたのである。

けれども、現在の感情研究の動向からすると、感情は社会からコンストラクションされ、さらには抑制されていることが明らかとなっている。このような感情の様相は、感情に自我を見出そうとする立場からすると、自我喪失の危機をもたらしているといえよう。

混沌とした現代社会に生きる人びとは、「わたし」を認識することが困難な状態にある。たとえば、自傷行為や自殺行為が、自分を追い詰め「自分には何もない」といった「自己否定」の現われであり、暴力行為や殺人行為が、自分を全面肯定し「他者がすべて悪い」といった「他者否定」の現われであるといったこともある。人びとには、「他者の過剰」や「自己の不確実感」が高まってきている。このような行為の一要因としては、自分が存在しているという実感がない、自分が何なのかわからない、ゆえに、自分があるということを証明しようとする行為の現れであると考えられる。それは、人びとが「自分さがし」を行ない、「本当の自分」について考えているという現われである。

自分は、楽しそうに振舞っているのに、他者には無理に楽しそうに振舞っているように見える。楽しさを感じている自分も他者に映った自分も自分である。では、自分が思う自分が「本当の自分」だろうか、それとも、他者に映し出された自分が「本当の自分」だろうか。「本当の自分とは何か」。それは、その問いを投げかけているのがまさに自分自身であり、「自分さがし」をしている自分自身ということである。そこには、「自分を超えたものが自分に即して働いている」のである（山田,2006:7）。

山田によれば、「自分さがし」には2つの問題が含まれている。現代という時代そのものの精神病理とも言うべき問題と「自分さがし」ということそれ自身に含まれている自己矛盾の問題である（山田,2006:3）。神が絶対的な存在ではなくなったこの時代は、人生で実現されるすべての意味は相対的なものにすぎず、死という現実を目の前には結局すべてが無意味化される。ひとは、そのような状況から「不安」と「すべては空しい」という思いから来る「空虚さ」といった事態から逃れられないようになる。「自分さがし」とは、あたかも自分の臍を自分で見つめるように、単に自閉的に自分の内面を観察するものではない。

ひとは血液型や星占いなどから自分を位置づけ「対象化された自分」を知ろうとする。しかし、それは「対象化された自分」であって「対象化する自分」ではない。「対象化された自分」とは客体としての自分であり、主体としての自分ではない。「自分が自分を知る」ということは、「自分が知る自分」と「知られる自分」とを二重化することである。そこにおいて「自己意識」が生まれてくる。自分以外のものを対象化する意識が「対象意識」であるならば、自分自身にはね返ってくる内省的（reflective）意識が「私というものが自分について考えている意識」（Cooley,1909:12=1970:14）である「自己意識」となる。

山田によると、「対象意識」から「自己意識」へということは、ひとが「社会生活において順境にあるとき、その意識は自分ならざるものへ向けられており、自分に向けられることは稀である」（山田,2006:204）。けれども、何らかの抵抗や挫折により、傷つき、痛い目に合うといった逆境に陥ったときには、その意識は自分に向けられる。すなわち、そのときに、ひとは自分を意識し、内省し、反省するようになる。このプロセスは、山田によると、精神的なものを成長させるとともに、新たな外界に向かうための糧となり、エネルギーを得ることになる（山田,2006:204）。

人びとにおいて、「対象意識」から「自己意識」へという方向と「自己意識」から「対

象意識」へという方向への循環は必要不可欠なものである。木村によると、真の「私」は一人称でしか語れない。「離人症」(デペルソナリゼーション)は、人間だれもが示しうる症状だとされる。「離人症」とは、「自分がなくなってしまった」、「自分ということが実感として感じられない」といったように「私がない」という体験である。「私がない」、「自分がなくなった」という場合の自分とはどのような「自分」を意味しているのだろうか。

「自分というもの」として表された「自分」の「ある」、「なし」は外部から第三者の眼で見たときにのみ言いうることである(木村,1983:47)。それは他者からみた「自分」ということである。そして、「……ということ」の言いかたは「私があるということ」と表裏一体の事態としてのみ成立する(木村,1983:49)。「……というもの」が中立的・無差別的な客観的对象であるならば、「……ということ」は実践的関与をうながす働きをもっている。

「机というもの」は一つの無意味な物体にすぎない。しかし、「机があるということ」や「机がないということ」は、自分の実存にとって便利であったり不便であったりすることの意味をもっている。同じように、「花というもの」と「花があるということ」は異なっている。「花というもの」は、ひとつの物体にしかすぎない。しかし、ひとが花を見て、美しいと思ったならば、「花」はひとつの物体ではなくなる。「花があるということ」、「花が美しいということ」、「花を見ているということ」、「花を見ている私があるということ」は、ひとが「花をみる」ことによる多面的な側面である。ここに「私がある」ということが想起してくる。それは、「……というもの」が中立的、無差別的な客観的对象となっていることに対して、実践的関与が示されている「……ということ」との相違である。

木村によると、「……というもの」、「……ということ」の相違は、誰もがそなえている視角、聴覚、触覚、味覚、嗅覚の5つの個別感覚による物理的、生理的な知覚作用によるものである。「甘いということ」は餡子の「甘さ」のみを意味するのではない。子どもの躰に対する「甘さ」、未熟な考え方に対する「甘さ」といったように、「甘いということ」が味覚のみを標識として捉えられているのではない。「甘い」、「黒い」、「美味しい」がたった1つの意味を有さないように、「私があるということ」が実感として捉えられることは、5つの個別感覚に共有され、統一している「共通感覚」(sensus communis)の働きによるものである(木村,1983:56)。

「離人症」はいわば「共通感覚」機能の喪失である。「離人症」患者は理性的な行動に関しては正常であるが、理性で間に合わないときに困難をきたしてくる。それは視角・聴覚・触覚・味覚・嗅覚のそれぞれの個別感覚によって統一される「共通感覚」が機能しないからである。「……というもの」は理解できても、「……ということ」が理解できない。いろいろなものはしっかりと見えているのに、そこに実際にあるという実感がない。「私がものをみている」ということが実現されない。したがって、「私がある」ということが実感できず「……のもの」が「ある」ということが実感できないことになる(注2)。

「……というもの」が理解できても「……ということ」が理解できないということは、他者とのコミュニケーションにおいても生じることである。他者とコミュニケーションを行なっている自分にはそこにはいるのに、そこに「私があるということ」が実感されないでいる。ひとは家庭での自分、職場での自分、学校での自分、地域集団での自分といったように、自分が属する集団や状況によりそこで自分に求められる役割は異なっている。ひとが、「本当の自分」が何なのかわからず、「自分さがし」を希求するということは、「自分があるということ」を実感できないからである。すなわち、「社会的役割」で表される「夫としての自分」、「母としての自分」、「社会人としての自分」といった「対象化された自分」に対する実感はあるとしても、「自分があるということ」が実感できないということである。

「自分というもの」と「自分があるということ」は異なっている。木村に沿って、「自分というもの」と「自分があるということ」を考えてみるならば、「自分というもの」は中立的で客観的対象物であるが、「自分があるということ」は「共通感覚」によって実践的関与が促されているものである。

感情には、病気と同じく、「主観的経験」、「表示反応」、「生理的反応パターン」、「対処反応」といったさまざまな要素がある。それらには、限定された数値で定義されるものではなく、生物学的要素もあれば、社会的起源といったように多様な要素が含まれている。それらをひとまとまりにしたものとして、「社会的役割」感情がある。それは、状況を評価し、その評価に対して行為し、評価に対する自分の身体反応を解釈する上で、適切に指示する社会的に決定されたルールとしての感情である(Cornelius,1996=1999:191)。

たとえば、友人が仲間の前で自分を罵倒し、屈辱を与えるといった状況において、

西洋文化では自分を罵倒した友人に対して「怒る」ことが妥当であり、怒らなければ他の友人から愚か者と表されてしまう。しかし、日本人の場合では、「あいまい」であり「情緒的」であるゆえに一人一人が無力とある。他者との人間関係を良好に維持し、配慮することが最優先とされる日本文化では、この状況で「怒る」ことは妥当な選択ではない。この状況では、他の仲間との兼ね合いを最優先とし、穏便にその場の状況を保つことが妥当とされる。

「社会的役割」をもつ感情は、個人内部で重要な機能を果たし、対人関係を左右することに不可欠な部分であり、政治的駆け引き材料であり、権力や支配力の取得や維持のための戦術や戦略となる社会的作用も果たしている。感情は、単なる人間の系統発生的な過去の名残ではなく、また厳密に生理的な用語として説明できるものでもない。むしろ、感情は社会的にコンストラクションされており、社会的レベルの分析のみで理解されるものである。その結果として、現代人は感情をコントロールすることに熱心になりすぎているといえるのではないだろうか。

## 第2節 コントロールされる感情

感情とは、それを感じた当事者がどのように認知し、意味づけし、経験していくかにより多様に変化するものである。カウンセラーを頼りに診察に訪れる患者は、自分の体験を語ることにより、感情を意識化し、認知し、その性質を知り、何らかの解決策を導き出していく。そのような感情について語られることは、限られた状況のみで行なわれることではない。

日常生活では、友人、家族などに対して喜び、悲しみ、怒り、不安などが語られる。そして、感情経験を他者に打ち明けることは、信頼感や親近感をもたらす親密な人間関係を作り出す働きをする。感情経験は、他者に語ることにより、自分自身で「感情のシナリオ」をコンストラクションしている（Gergen, 1994=2004:299-311）。

ガーゲンによると、暴力は「敵意」といった感情のシナリオである。たとえば、Aが大音量で音楽を聴いていたので、BはAに注意したが、AはBの注意を拒否した。再度、BはAに注意したが、Aは懲りずに大音量で音楽を聴き続けるのでBはAを脅した。しかし、AはBの脅しを無視し続けたので、Bは最終的にAに対して暴力を振るってしまった。ここでの暴力とは、「敵意」の感情の表れということになる

(Gergen,1994=2004:299-301)。

家庭内暴力やドメスティック・バイオレンスといったものは、「望まれない反復」パターンによって引き起こされる。「望まれない反復」パターンで繰り返される交流パターンには、参加者が望んでいるか否かに関わらず繰り返されることが多い。それは、自己と他者との関係性パターンということである。

ガーゲンによると、ある事象にはパターン化されたシナリオがあり、そのシナリオが開始されると決まった結末に向かうことを指摘する。すなわち、ある種の感情が生じるとき、そこから引き起こされるものは、すでに感情のシナリオに準じているのである。「感情のシナリオ」は、文化的慣習により制約されるが歴史的にも変化するものとされている (Gergen,1994=2004:311)。感情は固定化したものではなく、油絵が何度も何度も色づけされるように、再構成されるものである。「感情のシナリオ」が構成されることは、その個人と個人にとって感情が相互に理解されているからである。

他方、ホックシールドが見出したものは、感情をコントロールする方法とコントロールされることによる感情の様相である。彼女は、ひとがどのように感情を管理しているという問題意識から出発し、管理される感情を公的領域と私的領域との双方において示している。

ホックシールドによると、ひとは公的領域で求められる「感情労働」により「感じなければならない感情」をコンストラクションしている。それは、「感情ルール」を背景とする「感情マネージメント」である。公的領域において、自分の感情が「感情ルール」にそぐわない場合には、「表層演技」と「深層演技」といった「求められる感情」と「本当の自分の感情」との間のずれを埋める「感情操作」が行われる。

そして、「感情労働」による感情のコントロールは、私的領域での感情も影響を受けることとなる。すなわち、公的領域の感情が、「感情操作」し続けることにより、操作しない感情へとコンストラクションされる。それゆえに、私的領域での自然な感情が抑圧されてしまうのである。産業のサービス化がもたらした「感情の商品化」は、「感情操作」を必要不可欠なものにした。「感情労働」は、感情それ自体に商品価値を与えてしまったのである。

現在の社会状況における感情は、文化的影響を付随し、他者とのコミュニケーションにより「社会的・文化的な要因とも密接に関連」(井上,2005:63)した社会性を有している。そのひとつが「感情操作」である。「感情操作」は、人びとに日常生活を穏や

かに過ごせる手法を与えたが、本来、嘘であった感情を嘘でなくしたために、人びとの自我を危険にさらしている。「感情操作」は、直接関わる状況において、どのようにコントロールするかという意味では自分の感情と向き合っている。けれども、コントロールする感情が先行しているために、「自己感情」が疎外されることにもなる。

### 第3節 「自己感情」論の現代的展開

感情は他者とのコミュニケーションを通じて把握可能となる。そして、他者の期待と自分との間のずれを埋めるために、感情をコントロールしている。けれども、感情をコントロールすることのみに熱心であると、「対象化する自分」に辿りつけない状態におかれてしまう。

人びとは、感情をコントロールすることで「外なる自己」をうまく表出することを可能にしている。「外なる自己」とは、「他者に対して言葉や行動、態度に現れた自己」である（山田,2004:36）。ひとは、「外なる自己」をうまくコントロールすることで、他者とのコミュニケーションを順調に遂行していくなかで、「自分とは何か分からなくなる」といった「アイデンティティの拡散」にならないようにしている（山田,2004:174）（注2）。「外なる自己」は、他者にあわせて表出された自我であり、演じる自我である。それは他者により左右され、カメレオンのように変化・変容することが可能な自我である。

「外なる自己」は、他者とのコミュニケーションをスムーズにさせる。それは、他者に合わせたルールを身につけることで自分と他者との関係が変わるからである。ひとは、青年期において、他者とのコミュニケーションにおけるルールを身につけるといふ経験を通して、それぞれの他者が求めるものを学習していく。それを他者に表現することにより、自分について抱く他者の印象やイメージなども変わり、他者との共通ルールを見出していく（山田,2004:175）。

自我は他者の存在で変わる。他者が異なれば自分に対して求められるものは異なるからである。他者に映る自分とは外に現れた自分であるから、他者が求める自我を演じることによって、他者との関係を上手く成り立たせるようになる。それによって自我を喪失することなく、他者ともよりよい関係を築きあげ、自我を統一していくということになる。それが「外なる自己」が果たす作用である。

けれども、「外なる自己」は他者を重視した自我であるがゆえに、積極的、主体的な自我が喪失されていると考えられる(注3)。「外なる自己」は、自分が自分を対象化して自分を知る「対象化された自分」を分かりやすく表出している自我である。「対象化された自分」とは客体としての自分である。ひとは、「対象化された自分」により自分の属性を知ることができるが、自分自身や主体としての自分を知ることはできない。主体としての自分を知ることができるものが、「対象化する自分」である(山田,2006:5)。

「自分を自分として意識する存在(自己意識をもつ存在)は人間だけである」(山田,2006:84)と言われるように、ひとには自分を振り返るという「内省」がある。それは、自分が自分について考えるという「自己意識」でもある。ひとは、他者間で問題状況に遭遇したとき、その状況を思い浮かべることで、その問題に対する解決策を導き出していく。

ひとが、問題状況に遭遇した際にそのシグナル的要因のひとつとして考えられものが、クーリーの「自己感情」と考えられる。ここでの「自己感情」とは、第3章でも論じたように自己意識的「自己感情」を意味する。なぜならば、クーリーが子どもの観察を通して発見した「自己感情」は、成長とともに現れる「自己意識」を外しては考えられないからである。

クーリーは、「ワレ」意識とは、子どもが約2歳頃になるまで現れてこないという(Cooley,1909:7=1970:10)。当然のことながら、そこには「自己意識」、「社会意識」、「公的意識」も存在しないことになる。ここでの「ワレ」意識の芽生えとは、人称代名詞の習得とともに徐々に現れ、「自己所有化」行為はその顕著な現われである。そして「自己感情」は、人称代名詞と結びついて表されるものであり、また、「自己所有化」行為といった積極的な行為と結びついて表される行為である。したがって、クーリーの「ワレ」意識とは、他者とのさまざまな関係についての意識などと結びついて生成する意識であることから、意識と感情との関係を切り離して「自己感情」を理解することは不可能と考えられる。

このような見解からすると、ある程度まで成長した個人における「自己感情」とは、「社会意識」と「公的意識」とを含んだ「自己意識」化される感情となる。ひとは、自己意識的「自己感情」により自分自身と向き合うことが可能となっていく。自己意識的「自己感情」は、ひとがその感情に命名するところから始まる(注4)。



ホックシールドによると、ひとが生理的な状態によって引き起こされる感情に名前をつけない理由には十分な理由がある。生理学的な差異は、言葉のなかにある様々な感情の名前を弁別できるほどにはっきりしていない。しかし、ひとが感じたことにたった一つの名前を当てはめることは、不自然であり、安直である(Hochschild,1983=2000:254)。ひとが感じる複合的な感情とは、連続的に認知されたものである。

ひとは、ある出来事に対して「怒り」、「罪悪感」、「失望」、「不満」という感情が混じりあった経験をする。それは「ある瞬間ごとに、その状況の別々の特徴に『照準』を合わせた」結果である(Hochschild,1983=2000:254)。ある経験において、ひとつの側面が浮かび上がると、もう一方はその側面を照らすことになる。心の目は、ある地点から別の地点へと移動する。そして、ある点から別の点に注意点が移動することで、内部と外部の現実が次々と様々に接続される場所となる。ひとは、2つの主要な焦点をもっているため、2つの側面を同時にとどめておくことができる。一方の側面を浮かび上がらせるときには、もう一方でそれを照らす。それが、「光源」と「照準」である(Hochschild,1983=2000:254-255)。そして、感情は何を「光源」とし、何を「照準」にするかについての差異はあるものの、感覚、文化、社会的なものを要因とし名前を与えられることとなる。感情に名前をつけるということは、「自分があるものを理解する方法に名前をつけることであり、自分が知覚したことにラベルを貼ること」である(Hochschild,1983=2000:253)。ホックシールドがいうこのような命名法は、彼女が認知心理学者である J.カッツが進展させた考え方をさらに発展させた命名法である(Hochschild,1983=2000:253-263)。

ここで、ホックシールドも引用しているカッツの提唱したことから、この命名法について辿っていくことにする。古くからの友人が、交通事故で亡くなった場合のことを考えてみることにする。

私の悲痛な心の状態は、寂しさという固定化された経験ではなく、思い出すたびに寂しくなる、という連続的な状態である。私が、「彼はもう死んでしまった」という思いを光源とし「私は彼を大切に思っているし、彼にいてほしい」という思いに照準を合わせるとき、私が感じているものは〈寂しさ〉と呼ばれる。しかし、(宗教的な信念や事実の否定から)彼が死んだという証拠を信じず、同時に「彼が大切だし、彼にい

てほしい」という思いに照準を合わせるなら、そのとき、私は寂しさを感じないのである。もし、一連の心の動きの中で、ふと、「でも、私たちはすばらしい貴重な時間を過ごしたし、私にはその思い出があるのだ」という思いを持てば、そのときに感じるものは、幸福感や感謝と呼ばれる。「私たちのすばらしく貴重な時間」のことを考えながら、「でも、それは失われてしまった」と考えれば、感じるものは〈ノスタルジア〉と命名される(Hochschild,1983=2000:255)。

すなわち、名前をつけられた感情とは、それまでに抱いている考え方や仮設によって差異化することとなる(Hochschild,1983=2000:255)。この命名法は、「自己感情」が人間のもつ「光源」と「照準」により自己意識的「自己感情」なるという考えから「自己感情」にも適用可能な命名法と考えられる。

「自己感情」から自己意識的「自己感情」へのプロセスとは、自分と自分との相互作用という「内省」により可能となる。「内省」は人間適応能力である。ひとは、「内省と感情的、非内省と感情的、内省と感情なし、内省、感情もどちらもないことをわかっている」。すなわち、内省と感情との関連性は、非内省と感情的、内省と感情なし、内省も感情的もないものに区別される(Milles & Kleinman,1985:1010)。

内省することにより「自己感情」から自己意識的「自己感情」へとなった感情は、自分と他者との関係における自分自身を位置づけ、自分が何を欲し、何を他者に期待し、どのように他者を認識しているかについて教えてくれる感情である。ここに、他者との産物である「自己感情」の主体性が見出されることとなる。

自己意識的「自己感情」は、「自分であるということ」の実感を呼び起こし、主体である「対象化する自分」を知ることが可能にさせる感情である。自分の感情に心が開ける人ほど、他者の感情が理解できる。ひとが実際に目にするものはそのひと自身が感じる一部である。そこでの感情は、新たに理解された現実だけではなく、社会的要因をもったメッセージも知らせてくれる。それゆえに、ひとは感情に対して働きかけることとなる。それが、自己意識的「自己感情」であるならば、自分自身や主体となる「対象化する自分」と向き合うことを可能にする。

感情社会学は、感情が社会からコンストラクションされている様相を明らかにした。ひとは「感情労働」による「感情ルール」に従い、「感情操作」を行なっている。けれども、「感情操作」は危険な操作でもある。ひとは、自分自身で危険な操作を行ない、

自分を見失う道を辿っている。

感情社会学においては、感情が社会からコンストラクションされている様相を解明するのみではなく、社会からコンストラクションされているがゆえに疎外されている積極的、主体的感情をコンストラクションする様相を解明する必要がある。それが、「自己感情」を問題意識とすることから始まる新たな感情社会学の展開とされよう。

(注1) 「私というもの」、「自己というもの」は、「存在というもの」や「時間・空間というもの」と同様に、哲学的、科学的な議論の対象としては存在しても、実践的な生活にとっては、もともと仮空のもの、存在しないものである(木村,1983:61)。木村は、アリストテレスの「共通感覚」の思考を踏まえ、「生物学的実在」から「自分というもの」、「自分ということ」の相違を問いただしている。

(注2) 社会学者がとりあげるアイデンティティには、「社会的アイデンティティ」と「自己アイデンティティ」の類型がある(Giddens,2001:52)。

(注3) 山田は、「外なる自己」の形成を主張するにあたり、それを形成するために行なう演技に必要な自発点として「内なる自己」を捉えている(山田,2004:7)。けれども、ここでの「内なる自己」とは、「外なる自己」を形成するための要因としての自己にすぎず、最終的には「外なる自己」といった新たな自己に変化してしまうものとされる。「内なる自己」は、人間関係を上手く遂行されない要因とされている。

(注4) クーリーは、「自己感情」について、それは各個人の経験で呼び起こされる感情であり、誰にでも簡単に理解できる感情であることから、特徴づけることは無意味であるとし、「鏡に映った自我」概念ではプライドや屈辱といった「自己感情」と示す以外には、特定の命名は行なっていない。

## 結び

今日の社会学における自我研究は、シンボリック相互作用論、物語論、役割理論などといったように多様な分野から多様なアプローチのもとにその展開がされている。本論では、現代人における自我がどのように形成されているかについても一視座として感情論からの考察を試みたものである。社会学における感情研究は、1970年代を機に大きく変化し、今尚、発展途上にある分野と思われる。現在の感情社会学において、明らかにされていることは、社会からコンストラクションされている感情の様相である。産業の発達により現代人は、「感情労働」のもと「感情操作」が求められ、「感じなければならない感情」をコンストラクションしなければならない状況にある。

感情は、他者とのコミュニケーションにより形成される社会性を有している。しかし、人間特有の感情がすべて社会からコンストラクションされるものであるならば、自分が感じる「自己感情」はどこへいつてしまっているのだろうか。「自己感情」は、ホックシールドが考察したように「感情労働」による「感情マネージメント」によって、すべての感情が管理されており、「感じなければならない感情」としてあるのだろうか。その「感じなければならない感情」とは、ガーゲンが示したように「感情のシナリオ」として描かれるようにコンストラクションされているのだろうか。

そこで本論では、他者とのコミュニケーションにより形成され変化・変容していく感情であるが、個人にとって積極的、主体性を有しているであろう「自己感情」について考察し、それが自我の形成および変化・変容をもたらす感情であるということについて展開した（本論第3章 第1節）。ここでは、本論において考察されていた「自己感情」について再度辿り、クーリーが自我とする「自己感情」の有意義性についてまとめていくこととする。

本論における自我を「自己感情」であるとする考えは、クーリーがこの概念を「鏡に映った自我」概念の構成要素として示していることから出発している。「鏡に映った自我」概念は、社会学において有名な自我概念のひとつである。それは、他者とのコミュニケーションにより形成される自我で、すなわち「社会的自我」であるということを示したという点で、クーリーが生きた時代においては新たな視座を与えるものであった。けれども、「自己感情」を自我とするその思想は、当時のアメリカ社会学においては容易に受け入れられる見解ではなかったのである。

第1章で示したように、当時のアメリカ社会学は、南北戦争後の資本主義の急速な発展に伴い産業化や都市化が進行するなかで「秩序の社会学」として成立した。当時の社会学者に浸透していた思想は、スペンサーの学説であった。クーリーもまた、その影響を受けたひとりであったが、シューベルトらの社会学者によって称されているように、彼はダーウィン主義者であった。そして、彼を社会学者の道へと導いたウォードとギディングズからの影響もあって、彼の目指した社会学とはスペンサーの思想に依拠する生物学的社会学というよりは心理学的社会学であったといえよう。

その心理学的思想をもつクーリーの考えは、第3章で示したようにジェームズの思想に即したところが大きいといえる。クーリーは、ジェームズの自我についての考えに影響されながらも「主我」(I)や「客我」(me)といった「自我」に線引きをする手法は用いなかった。むしろ、「主我」とされる「I」や「客我」とされる「me」といったものは、クーリーにとっては人称代名詞として理解されるところのものであった。

クーリーが強調するところの「社会的自我」とは、心理学者が経験的自我とするところのものである (Cooley, 1902: 168-169)。自我の社会性を主張するクーリーは、ジェームズからその思想を学び、観察という方法によりその事実を確かなものにしたといえよう。

まず、その思想についてであるが、先述したようにクーリーの自我論には「主我」と「客我」という見解はなされていない。彼が、自我とする「自己感情」とは、ジェームズが「客我」とするものが引き起こすものである。ジェームズが、「温情と親密」を「客我」と呼んだことによって覆い隠した感情を自我と位置づけたのである (本論第3章 第3節)。

ジェームズの「客我」は、「物質的客我」、「社会的客我」、「精神的客我」に分けられている。「物質的客我」とは、ひとが生活するなかで興味をもつものと結びつき、盲目的な衝動を有するものである。ジェームズは、その核心を身体とし、次いで衣服、家族、家を挙げている。ひとが何かを所有しようとすることと自我との関係をクーリーの用語で言い換えるならば、「自己所有化」行為と「自己感情」との関係ということになろう。この「自己所有化」行為とは、クーリーが子どもの観察から発見し、彼を再評価したフランクとゲーカスも注目したところのものである。

次いで、「社会的客我」とはひとが他者から受ける認識である。「社会的客我」と「自己感情」とを関係づけるならば、「自己感情」は「社会的客我」による感情に他ならな

い。

最後に「精神的客我」とは自分の意識状態や心的能力などを意味する。ジェームズは、「精神的客我」の中心部を成しているものとは、能動的な感じをもった意識状態とする。「精神的客我」と「自己感情」とを関係づけるならば、「自己感情」は彼の観察からすると子どもの積極的な感情の発露である。したがって、「自己感情」は「精神的客我」に内包されたものということになる。

このようにクーリーが、「社会的自我」を主張するにあたりその思想をジェームズから学びとっていることは、以上の考察から明らかにされたといえよう。

また、クーリーの「社会的自我」論の決定的特徴は感情にあるが、ミードの見解からも顕著なように批判されてきた。むしろ、ミードのクーリーについての理解が彼についての一般的な見解とされてきたのである（本論第3章第2節）。けれども、本論の見解からすると、クーリーの「社会的自我」すなわち「自己感情」についての見解は、「鏡に映った自我」概念のみの解釈では一側面でしかない。クーリーの「自己感情」についての理解は、「鏡に映った自我」概念が展開されている『人間性と社会秩序』のみで理解するのでは不十分であり、『社会組織論』で展開されている「第一次集団」論、近代的コミュニケーション論、意識論との関係および彼が書き残した論文からもその思想を辿っていかなければ、彼が自我を「自己感情」のうちに見出したことの真意がみえてこないのである。

クーリーにおける「自己感情」の生成は、「第一次集団」における他者とのコミュニケーションから始まる。そのコミュニケーションの源泉は「人間性」にある。「自己感情」とは人称代名詞の獲得と「自己所有化」行為の要因であり、「人間性」を習得していくプロセスにおいて見出されるものである。クーリーにおいて、「第一次集団」は「人間性」の発達そのものにとっての出発点であり、第一次的なものであり、また、「自己感情」の生成そのものにとっても出発点となり、やはり第一次的なものである（本論第2章第1節）。

さらに、クーリーは、『社会組織論』において「第一次集団」とは別に情報メディアが発達し発展していく社会における近代的コミュニケーションという新たなコミュニケーションのあり方を展開している。近代的コミュニケーションは、「保存」と「普及」から成るコミュニケーションであり、人びとに広範囲にわたる人々との共通の感覚を促進させる。他方で、近代的コミュニケーションによる「拡大」と「活発化」は、個

人の思想や感情を浅薄で月並みな性質にしてしまうものでもある。クーリーの見解からすると、近代的コミュニケーションとは、他者との交流を広めるが、個人と個人との関係を表面的なものにしてしまうコミュニケーションでもあると指摘されている（本論第2章 第3節）。

他方、クーリーにおける意識論であるが、デカルトのいう独立した自我といった観念は幻影にすぎないとする彼は、自我が社会より先行して実在するものとは考えない。むしろ、個人と社会とを二分しない立場に立つクーリーは、「ワレワレ」あつての「ワレ」意識とする。それは、人称代名詞の習得により「ワレワレ」あつての「ワレ」とされるところである。

クーリーの見解からすると、「ワレ」である「私は」(I)の習得は、「あなたは」(you)を始めとする人称代名詞の習得がなければ、はっきりと現れないものとされる。たとえば、「あなたのお歳は」と聞かれて、「わたしは3歳」と答えることは、「わたし」と「あなた」といった人称代名詞を正確に習得したからとされる。ここでの「わたし」の習得は、「あなた」を含む「わたし」である「ワレワレ」を意味する。「ワレワレ」あつての「ワレ」意識とは、私が自分について考える「自己意識」、私が他者について考える「社会意識」、コミュニケーションをしているグループにおいて組織化されたものとしての「社会意識」についての集合的な見解である「公的意識」が相互に関連している意識とされるところである（本論第3章 第3節）。

以上のようなクーリーの意識論を考慮したうえで、「自己感情」を捉えなおすと、意識と感情との関係を切り離して「自己感情」を理解することは不可能である。クーリーは、確かに「ワレ」意識がはっきりと現れる以前に子どもに「自己感情」が生じていることを発見している。けれども、「鏡に映った自我」の概念要素からすると、「自己感情」が生じることは他者の認識や評価を通してのものである。したがって、彼が自我とするところの「自己感情」は、「ワレ」意識が生成する以前とある程度まで成長した個人における「自己感情」とに線引きできる見解となる。クーリー自身は、このような見解を示していないが、前者の段階の「自己感情」と示すならば、後者の段階の「自己感情」は自己意識的「自己感情」となる。

本論では、クーリーの社会的自我論については、「鏡に映った自我」概念のみが有名であったために安易に解釈されてきたことを問題視し、クーリーの思想をより多面的に考察することにより、「自己感情」についての新たな特徴を提示することを試みた。

新たな特徴とは以下の3点である。①「自己感情」は、他者から反映された自己意識的「自己感情」である。②「自己感情」が生じる他者とは、自己によって選択された個別的な「意味のある他者」である。③「自己感情」が生じる他者とのコミュニケーションには、あらゆるコミュニケーションが該当するわけではない。自己と他者間において、「共感」を有しており、「親しい結びつき」をもつコミュニケーションこそが該当するのである（本論第3章 第3節）。

そして、第3章で位置づけられた新たな「自己感情」についての解釈は、感情社会学が展開している「感情労働」により疎外され、抑圧されている感情について考察する際の視座を与えるものとなる。

感情社会学者のひとりであるホックシールドは、サービス業に携わる人々は、サービスを提供するために「感情労働」を行なっていることを指摘する。企業組織に委ねられている公的領域では、「感情労働」が求められ、そこでの人びとの感情は他律化している。「感情労働」を行なう人びとは、「表層演技」と「深層演技」とをうまくコントロールすることにより自己を保持していくのであるが、「公的な自己」と「私的な自己」が切り離せなくなっていることも事実である。それゆえに、人びとは、公的領域においても私的領域においても、どれが「本当の自分」であるのか、どれが「演じられた自分」であるのかわからなくなってしまう。これが、ホックシールドが展開した「感情労働」の様相であり、その危険性である（本論第4章 第3節）。

崎山は、このような「感情労働」が求められる現状について、「感じなければならない感情」により「自然」な感情経験が抑圧されている現状を指摘する。そして、現代とは「感情意識化」が求められる時代であるとする。彼が指摘するように、現代人は感情を意識化して、自分と向き合っていかなければならない現状にある。

本論文での主張の最も重要な論点とは、「自己感情」と向き合い意識化することの必要性とその方法とをクーリーの「自己感情」と関連づけつつ明確にすることであった。換言すれば本論文は、コントロールされて日常生活のなかで見失われつつある自己意識的「自己感情」の真のあり方に共感できる人間関係のなかで気づき、それらに、「これは怒り」、「これは悲しみ」と名前を与えながら再発見していくことの必要性を主張するものである。そして、自己意識的「自己感情」と向き合うということは、ひとがその感情に命名するところから始まる。その命名法とは、その感情について何を「光源」とし、何を「照準」にするかについてラベルが貼られた感情である。



現代の感情社会学研究の動向からすると、「感情労働」を始めとして感情が社会からコントロールされていることが現実であろう。しかしながら、感情が社会からコントロールされるのみでは、現代人特有の「自己感情」は喪失してしまっているのだろうか。ひとは、他者との関わりのなかで言語、思想、行為、あらゆるものを学び、習得していく。感情もそのひとつとして、他者とのコミュニケーションにより生成、形成、変化・変容していくものである。

本論が「自己感情」に焦点を絞りその重要性を主張する理由は、「自己感情」および自己意識的「自己感情」といった感情が、命名することで「自分があるということ」の実感をもたらす感情であると考えられるからである（本論第5章 第1節 第3節）。感情をコントロールすることで他者との関係性が友好的な場合もある。公的領域の労働では、賃金との交換価値との兼ね合いで、感情をコントロールしなければならない場合もある。しかし、とりわけ私的領域での他者とのコミュニケーションでの感情には、もっと目を向けてみるべきである。

現代人が、社会を優先とし、他者を優先とし、「自己感情」から目を背けることを習得してしまったならば、そこに「わたし」は存在するのだろうか。感情から自我を見出す見解は、認識できないがゆえに困難であるが、感情が人間特有のものあることもまた事実である。クーリーが身近な観察記録から発見した「自己感情」とは、コントロールされていく感情のなかで、「わたし」の存在の再発見をもたらす感情であろう。その感情こそが、今後の感情社会学の分野でその様相を始めとして解明していかなければならないものだといえよう。

おわりに

本論は、クーリーの「自己感情」論に焦点を絞り、その考察を試みてきた。しかしながら、本論における「自己感情」について展開し、主張できたことは、ほんの一握りの見解でしかない。多様に変化するこの社会において、感情が社会からコントロールされていくことは変わらない事実であろう。

今後の課題としては、公的領域のみならず私的領域における感情のコントロールの様相を明らかにしていく必要がある。現代人は、家族、友人、夫婦、恋人といった「親しい結びつき」がある他者とのコミュニケーションにおいても感情をコントロールしているのだろうか。そこでの「自己感情」の内実を知るためには、理論的見解のみならず、実証的研究からもその内実を明らかにしていく必要があると思われる。

現代社会において、コントロールされている感情を認識しながらもそこで疎外され、抑圧されている感情についての研究をより深め、現代人が有する感情の内実を把握していかなければならないであろう。

本論文は、先生方の多大なるご指導とご助言により、ここに完成することができました。主査の宇都宮京子先生は、分野が異なるがゆえに見落としをしまいがち論点について常にご指摘、ご助言を頂き、ご指導下さいました。先生の多方面に渡るご指摘は、より深く、より詳細に研究を突き詰めていくその視座を与えて下さいました。いつも温かく見守り、ご指導下さいましたことに心から感謝申し上げます。

副主査の原山哲先生と安藤清志先生にも貴重なご助言、ご指導を頂きましたことに御礼を申し上げます。先生方の多方面からのご助言は、研究を進めていくうえで必要な新たな視点、考え方などを学ばせて下さいました。温かく見守りご指導下さりましたことに、心から感謝申し上げます。

そして、前東洋大学（現放送大学）教授の船津衛先生は、常に適切なアドバイスを頂き、長い期間に渡り多大なるご援助を頂きました。常に見守り、心温かなご指導を頂きましたことに厚く感謝を申し上げます。

引用・参考文献

- 浅野智彦,2001,『自己への物語論的接近 家族療法から社会学へ』,勁草書房
- Cooley,C.H.,1902,*Human Nature and the Social Order*. Schocken Books
- Cooley,C.H.,1908,“A Study of the Early Use of Self-Words by Child”,*The Psychological Review*,6:339-57
- Cooley,C.H.,1909, *Social Organization* ,Schocken Books=1970 大橋幸,菊池美代志訳  
『社会組織論』青木書店
- Cooley,C.H.,1918,*Social Process*, Schocken Books
- Cooley,C.H.,1920,“Reflectios upon the Sociology of Herbert Spencer”,*In Sociological Theory and Social Research: Being Selected Papers of Charles Horton Cooley*, ed Robert Angell. New York:Holt
- Cooley,C.H.,1926,“The Roots of Social Knowledge”,*In Sociological Theory and Social Research: Being Selected Papers of Charles Horton Cooley*, ed Robert Angell. New York:Holt
- Cooley,C.H.,1929a,“The Life-Study Method as Applied to Rural Social Research”,*In Sociological Theory and Social Research: Being Selected Papers of Charles Horton Cooley*, ed Robert Angell. New York:Holt
- Cooley,C.H.,1929b,“The Development of Sociology at Michigan”,*In Sociological Theory and Social Research: Being Selected Papers of Charles Horton Cooley*, ed Robert Angell. New York:Holt
- Cornelius,R.R.,1996,*The Science of Emotion* Prentice-Hall=1999 斉藤 勇訳『感情の科学——心理学が感情をどこまで理解できたか——』誠信書房
- Coser,L.A.,1978,*A History of Sociological Analysis*=1981 磯部卓三訳『アメリカ社会学の形成』アカデミア出版会
- Dewey,R.,1948,“Charles Horton Cooley: Pioneer in Psychosociology”, Barnes,H.E.(ed.),*An Introduction to the History of Sociology*, The University of Chicago Press,833-852
- 土井健郎,1971,「『甘え』の構造」,弘文堂
- 土井健郎,1975,「『甘え』雑稿」,弘文堂
- 榎本博明,2002,『〈ほんとうの自分〉の作り方ー自己物語の心理学』,講談社現代新書

- Erikson, E.H., J.M. Erikson., 1997, *The Life Cycle Completed*, W.W. Norton & Company=2001, 『ライフサイクル、その完結』 村瀬孝雄 近藤邦夫訳 みすず書房
- Evans, D., 2001, *Emotion: A Very Short Introduction*, Oxford =2005, 遠藤利彦, 『感情』, 岩波書店
- 船津 衛, 1983, 『自我の社会理論』, 恒星社厚生閣
- 船津 衛, 1989, 『ミード自我論の研究』, 恒星社厚生閣
- 船津 衛, 1995, 『『自我』の社会学』, 井上俊 上野千鶴子他編 『自我・主体・アイデンティティ』, 岩波書店, 45-68
- 船津 衛, 1999, 『アメリカ社会学の展開』, 恒星社厚生閣
- 船津 衛, 2001, 「アメリカ社会学の動向」, 船津衛編 『アメリカ社会学の潮流』, 恒星社厚生閣, 1-10
- 船津 衛, 2005, 『自我の社会学』, 放送大学教育振興会
- 船津 衛, 2005, 「認識する私」, 井上俊 船津衛編 『自己と他者の社会学』, 有斐閣
- 船津 衛, 2006, 「感情の社会的世界」, 船津衛編 『感情社会学の展開』, 北樹出版, 11-34
- 船津 衛, 2006 b, 「自我と『親密性』」, 大橋良介, 高橋三郎, 高橋由典編, 『学問の小径 社会学・哲学・文学の世界』, 世界思想社, 21-31
- Franks, D.D. and V. Gecas, 1992, “Autonomy and Conformity in Cooley’s Self-Theory”, *Symbolic Interaction*, 15(1):49-68
- Fromm, E., 1950, *Psychoanalysis and Religion*, New Haven Yale University Press =1953 谷口隆之助 早坂泰次郎訳 『精神分析と宗教』
- Fromm, E., 1956, *The Art of Loving*, Harper & Brothers Publishers=1991 鈴木晶訳 『愛するということ』 紀伊国屋書店
- Fromm, E., 1979, *Greatness and Limitations of Freud’s Thought*, Dr. Ruth Liepman Literary Agency=1980 佐野哲郎訳 『フロムを超えて』 紀伊国屋書店
- Frued, S., 1915, *Tried und Tribschicksale*=1970 小此木啓吾訳 「本能とその運命」 『フロイト著作集 第6巻 自我論・不安本能論』 59-77
- Frued, S., 1923, *Das Ich und das Es*=1970 小此木啓吾訳 「自我とエス」 『フロイト著作集 第6巻 自我論・不安本能論』 263-299
- 玄田有史 曲沼美恵, 2004, 『ニート フリーターでもなく失業者でもなく』, 幻冬社
- Gergen, K., 1994, *Realities and Relationship—Soundings in Social Construction*

- Sage Publications =2004 永田泰彦・深尾誠 『社会構成主義の理論と実践 関係性が現実をつくる』 ナカニシヤ出版
- Gergen,K.,1999,*An Invitation to Social Constryction* ,Sage Publications,Harcourt =2004 東村知子訳 『あなたへの社会構成主義』 ナカニシヤ出版
- Gerth,H.H. & C.Wright Milles.,1953,*Character and Social Structure: the psychology of social instructions*,Harcourt=1970 古城利明 杉森創吉訳 『性格と社会構造—社会制度の心理学—』
- Giddens,A.,1992,*The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticisim*, Polity Press =1995 松尾精文 松川昭子訳 『親密性の変容—近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』 而立書房
- Giddens,A., 2001,*SOCILOGY*=2004 松尾精分,西岡八郎 他訳 『社会学』 而立書房
- Goleman,D.,1995,*Emotional Intelligence*, Bantam Books=1996 土屋京子訳 『EQ こころの知能指数』 講談社
- 挟本 佳代,2002,「進化論と社会学の起源」,『社会学史研究』,24:45-59
- 橋爪大三郎,2003,「『心』はあるのか」,筑摩書房
- 速水 敏彦,2006,『他人を見下す若者たち』,講談社現代新書
- Hermans,H.M & H.G.Kempen, 1993,*This edition of The Dialogical Self*,Elsevier Inc =2006 溝上慎一,本間玲子,森岡正芳訳『対話的自己 デカルト/ジェームズ/ミードを超えて』 新曜社
- Hochschild,A.R.,1983,*The Managed Heart:Commercialization of Human Feeling*, University of California=石川 准,室伏亜紀訳 『管理される心—感情が商品になるとき』 世界思想社
- 巖谷奈々,2001,『感じない子どもこころを扱えない大人』,集英社新書
- 宝月 誠・中野 正大,1997,『シカゴ大学の研究』,恒星社厚生閣
- 今田高俊,2005,『自己組織性と社会』,東京大学出版社
- 磯部卓三,2006,「成長する生命体—C・H・クーリーの自己論再訪」,大橋良介,高橋三郎,高橋由典編,『学問の小径 社会学・哲学・文学の世界』,世界思想社,33-43
- 板倉昭二,2006,「『私』はいつうまれるのか」,ちくま書房
- Jacobs G.,2006,*Charles Horton Cooley Imagining Social Reality*,University of Massachusetts Press

- James,W.,1892,*Psychology*,Henry Holt=1992 今田 寛訳『心理学』岩波書店
- Jandy,E.C.,1942,*Charles Horton Cooley His Life And His Social Theory*, The Dryden Press
- 架場久和,1981,「近代的自己とアンビヴァレントな〈状況〉」,『現代社会学』,講談社
- 片桐雅隆,2006,『認知社会学の構想』,世界思想社
- 香山リカ,1999,『〈じぶん〉を愛するということ 私探しと自己愛』,講談社現代新書
- 香山リカ,2005,「いまどきの『常識』」,岩波書房
- 香山リカ,2006,『貧乏クジ時代』,PHP 研究所
- 香山リカ,2006,「若者とパフォーマンス」,香山リカ,下斗米淳,貫成人,芹沢俊介編『はんなりする身体』,専修大学出版局,1-73
- 木村倫行,2005,『鶴見俊輔ノススメ—プラグマティズムと民主主義』,新泉社
- 木村 敏,1983,『自分ということ』,第三文明社
- 木村 敏,2005,『あいだ』,筑摩書房
- 木村 敏,2005,『関係としての自己』,みすず書房
- 久保 ゆかり,2006,「感情の機能についての理解—発達研究を通して—」『感情の社会的機能とその理解および応用—豊かな感情生活を生きるために』,平成15年度～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(B)研究成果報告書),33-55
- 小島 勝,1979,「C・H・クーリーと第一次集団」,『ソシオロジ』23:19-37
- 鯨岡 峻,1997,『原初的コミュニケーション』,ミネルヴァ書房
- 前田征三,1999,「初期シカゴ学派とクーリーの社会学」,『情況—20世紀社会学の知を問う—』,情況出版,69-79
- 正村俊之,2001,『コミュニケーション・メディア—分離と結合の力学』,世界思想社
- Mead,G.H.,1913,“The Social Self”, *Journal of Philosophy*,19:157-163=1991a 船津衛・徳川直人訳「社会的自我」『社会的自我』,恒星社厚生閣,1-14
- Mead,G.H.,1922,“A Behavioristic Account of the Signification Symbol”, *Journal of Philosophy*,19:157-163=1991b 船津衛・徳川直人訳「意味のあるシンボルについての行動主義的説明」『社会的自我』,恒星社厚生閣,15-28
- Mead,G.H.,1924-25,“The Genesis of the Self and Social Control”,*International Journal of Ethics*,35:251-277=1991c 船津衛・徳川直人訳「自我の発生と社会的コントロール」『社会的自我』,恒星社厚生閣,29-74

- Mead, G.H., 1930, "Cooley's Contribution to American Social Thought", *A.J.S.*, 35:693-706
- Mead, G.H., 1934, *Mind, Self and Society*, =1973 稲葉三千男ほか訳『精神・自我・社会』青木書店
- Mills, T & Kleinman, 1988, "Emotions, Reflexivity and Action", *Social Forces*, 66: 1009-1027
- Musolf, G.R., 2003, *Structure and Agency in Everyday Life*, Rowman & Littlefield Publishers
- 三浦 展, 2005, 『下流社会 新たな階層集団の出現』, 光文社新書
- 三浦 展, 2005, 「消費社会の物語と喪失と、さまよう『自分らしさ』」, 上野千鶴子編『脱アイデンティティ』, 勁草書房, 103-135
- 森 真一, 2000, 『自己コントロールの檻』, 講談社選書メチエ
- 森 健, 2006, 『グーグル・アマゾン化する社会』, 光文社新書
- 森下伸也, 2006, 「逆説思考——自分の『頭』をどう疑うか」, 光文社
- 中山 元, 2004, 「〈ぼくと〉世界をつなぐ哲学」, 筑魔書房
- 西川 真規子, 2006, 「感情労働とその評価」, 大原社会問題研究所, 567
- 貫 成人, 2006, 「自我の変容——そのプロセスとメカニズム」, 香山リカ, 下斗米淳, 貫成人, 芹沢俊介編『はんらんする身体』 121-150, 専修大学出版局
- 小川祐喜子, 2003, 「C・H・クーリーの社会的自我論の再検討」, 『現代社会理論研究』, 13:366-372
- 小川祐喜子, 2005, 「C・H・クーリーの『自己感情』概念の再構成」, 『現代社会理論研究』, 15:497-502
- 小川祐喜子, 2006, 「自己感情」, 船津衛編, 『感情社会学の展開』, 北樹出版, 67-76
- 岡原正幸, 1997, 「感情社会学の成立と展開」, 岡原正幸山田昌弘他編『感情の社会学—エモーション・コンシャスな時代—』, 世界思想社, 2-42
- 岡原正幸, 1997, 「感情自然主義の加速と変質——現代社会と感情」, 岡原正幸山田昌弘他編『感情の社会学—エモーション・コンシャスな時代—』, 世界思想社, 91-137
- 奥村 隆, 1998, 『他者という技法 コミュニケーションの技法』, 日本評論社
- Reitzes, D.C. and W.E.Hall., 1982, "Cooley Revisited: The Treatment of Cooley's Sociological Orientation", *Sociological Spectrum*, 2:133-156

- 冷泉彰彦,2006,『関係の空気』『場の空気』,講談社
- Ritzer,G.,1996,*The Mcdonaldization of Society*, Pine Forge Press=1999,正岡寛司訳  
『マクドナルド化する社会』早稲田大学出版部
- Ritzer,G.,2003,「マクドナルド化現象と日本」,Ritzer.G.丸山徹夫編,『マクドナルド化  
と日本』,ミネルヴァ書房,12-33
- Ritzer,G.,2004,*The Globalization of Nothing*, Pine Forge Press=2005,正岡寛司監訳  
山本徹夫 山本光子訳「無のグローバル化—拡大する消費社会と『存在』の喪失」  
明石書店
- 齋藤茂太,2004,『あなたは他人にどう見られているか』,青春出版社
- 斉藤 環,2001,『若者のすべて ひきこもり系 VS じぶん探し系』,PHP エディターズ・  
グループ
- 斉藤 環,1998,『ひきこもり 終わらない思春期』,PHP 研究所
- 崎山治男,2005,『心の時代』と自己』,勁草書房
- Schubert,H.J.,1998,*On Self and Social Organization*, The University of Chicago  
Press
- Scheff,T.J., Goffman 2006,*Unbound A New Paradigm For Social Science* ,Paradigm  
Publishers
- 下斗米 淳,2006,「アイデンティティと苦悩する若者と大人」,香山リカ,下斗米淳,貫成  
人,芹沢俊介編『はんなりする身体』,専修大学出版局, 75-120
- Spinoza,Benedictus de,1677,ETICA.=1951,畠中尚志訳『エチカ』(上) 岩波書店
- Spinoza,Benedictus de,1677,ETICA.=1951,畠中尚志訳『エチカ』(下) 岩波書店
- 高橋由典,1996,『感情と行為 社会学的感情論の試み』,新曜社
- 高田明典,2006,『私』のための現代思想』,光文社
- 友野典男,2006,「経済は『感情』で動いている」,光文社
- 高山 直,2005,『人を動かす!EQ マネジメント』,技術評論社
- Turner,J.H.,2002, *Face To Face.*, Stanford University press
- Turner, R. H.,1976, “The Real Self”,*A.J.S.*,81:989-1016
- Turner,R.H.&J,Schutte.,1981,“The True Self Method For Studying The  
Self-Conception”,*Symbolic Interaction*,4(1):1-20
- 上野千鶴子編者,2005,「脱アイデンティティの理論」『脱アイデンティティ』,勁草書房,



- 純子海原,2006,『こころの格差社会——ぬけがけと嫉妬の現代日本人』,角川書店
- 山田和夫,2004,『『外なる自己』の作り方』,亜紀書房
- 山田邦男,2006,『〈自分〉のありか』,世界思想社
- 山田昌弘,1997,「感情社会学の課題」,岡原正幸 山田昌弘他編『感情の社会学—エモーション・コンシャスな時代—』,世界思想社,43-68
- 山田昌弘,1997,「感情による社会的コントロール——感情という権力——」,岡原正幸 山田昌弘他編『感情の社会学—エモーション・コンシャスな時代—』,世界思想社,69-90
- 矢澤 修次郎,1984,『現在アメリカ社会学史研究』,東京大学出版
- 吉田 裕,1972,「クーリーの理論」,新明 正道ほか編『現代社会学のエッセンス』,ペリかん社
- 好井裕明,2006,『『あたりまえ』を疑う社会学——質的調査のセンス——』,光文社
- 和田秀樹,2006,「人は『感情』から老化する——前頭葉の若さを保つ習慣術——」,祥伝社
- 鷺田清一,1996,『じぶん・この不思議な存在』,講談社
- Wiley Norbert,1994,*The Semiotic Self*, Blackwell Publishers though=1999『自我の記号論』法政大学出版局

